

---

# 繋ぐモノ

れん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

繋ぐモノ

### 【Nコード】

N4342Y

### 【作者名】

れん

### 【あらすじ】

樋田 玲哉<sup>しただ れいや</sup>、十六歳の高校二年。

昔から、人ならざるモノが見えた。

周りには気味悪がられ、自分は異質なんだと認識する。

そしてそんな体質から、ウラの世界を知ってしまう。

「両親は？」

いない。

「なんで？」

知らない。

「どんな人？」

わからない。

忘れてしまったんだ。

まるでそこだけを切り取られたかのように。

まるで穴があいてしまったかのように。

これは、ウラの世界で強く生きる、ウラの会社員である青少年たちの物語。

これは「小説&まんが投稿屋」にも投稿している作品です。

## ウラの人間

裏とは、表の反対。

世界で例えるなら、表とは俺が昨日まで居た場所のこと。裏とは昨日から引きずりこまれた、表とは全く別に見える場所のこと。更に言うなら、裏の世界は表の世界とは表裏一体のような場所で、俺はそのことに関して驚いた。

別に裏の世界が異世界だと言いたいわけではない。ただ？ここ？は昨日とは違う。

ただし俺限定。他の人にはわからない、俺だけが見える裏の世界。表は裏によつて創られた、表は裏がなければ存在できない。まさに言葉通りだった。

\*\*\*\*\*

事の始まりは、昨日の昼。

学校の屋上にいた俺は、大きく大きく欠伸をした。

「眠い」

独りでに呟いた。

屋上に誰も見当たらないのは、今は授業中だからだ。

サボりではない、既に欠席扱いなのだ。どうせ学校にいたって楽しい訳じゃない。

ふと屋上の隅に視線を向けると、黒い煙のようなモノが浮いていた。ふよふよと漂っては消える、あれらはそういうモノだった。そしてあれらは他の人には見えない。見えるのは俺だけだ。

それは俺が十六年間生きてきた中で学んだ、精一杯の結果だった。裏を返せば十六年間で知ったのは、それだけのことだと言っているようなものだが。

黒い影のようにも見えるモノは、もっと言えば闇のようにも見える。もしかしたら、本当の闇とはああいうモノを言うのだろうか。

見えるだけで知らない。

あれらが人間に害を及ぼすモノなのか、そうでないのか。それさえわからない。

俺は隅で漂う『闇』に舌打ちをすると「あっち行け」と言って舌打ちをした。傍<sup>はた</sup>から見れば、独り言を言って何もないうところに舌を出す、精神がおかしい可哀想な奴である。

「触つても害はないのかねえ・・・」

物心がついた頃には見る事ができた『闇』、俺の中では当たり前前の存在だった。

これが周りにも同じように見えるといつも信じていた。

それなのに周りの人々は口々に言う。

「こいつ、何言ってるの?」と。

そこで悟ってしまった。

おかしいのは俺で、正しいのは周り。周りにとって俺は、嘘を言っている。あるいは気味の悪い奴でしかないのだ。

それを知ってからは関わりを持つこともなかったのだが・・・最近頻繁に見るようになったそれらを見ると、興味が湧くのだ。これらは一体何で、どうして存在しているのか。

触るのにも躊躇っていたのだが、そろそろその我慢も尽きてきた。

「ちょっとだけなら、いいかな」  
どこにも制する者はいない。咎める者もない。だって周りは見えないのだから。  
軽快な足取りで近付き、ふよふよと浮かぶ『闇』の前で膝をつく。そつと手を前に伸ばし、黒い煙のようなそれを指先で触れる否、触れようとした。

ゴオオオ

「ツ・・・え、何・・・？」  
触れようとした瞬間だ。それがいきなり炎に包まれ、熱さのあまりに反射的に手を引いた。

「キイイイ」と耳を劈くような、手を覆いたくなるような『音』を出すと、それは炎と共に跡形もなく消えた。

何が起きたのかと目を丸くして辺りを見回すと、ガガツと屋上のフェンスが揺れた。

そしてフェンスに手がかり、ヒョイツと音がつきそうなくらい軽い動きで、俺より一回りくらい大きい体格をした誰かがフェンスの上に乗った。そいつは見るからに男で、柔らかい栗色の髪をした、俺より三つ四つくらい年上の男だった。

特徴的なのは髪型で、栗色の髪の左側だけを後ろに上げてピンで止めているという、実に個性的な髪型だったのだ。

男はニヤリと意地悪そうに笑うと、額に血管を浮かばせていた。

「やあ　　つと見つけたぜエ？手こずらせやがってよ。これじゃ、ハクにまた何か言われるぞ。どうしてくれんだ？ああ！？」

男は笑ってはいたが、あきらかに怒っていた。怒っている相手は、

先ほど俺が触ろうとしていた『闇』らしいが、もうそこには何もない。

あれは炎で燃えるのか、と思い「また賢くなったな」と男に聞こえないように呟いた。

男はまだイライラするようで、フェンスに二、三回拳を叩きつけると息をついた。

「それより、下から人・・・？どうやって・・・」

男がフェンスに拳を叩きつけている間、俺はと言うと固まっていた。最初は冷静に物事を分析していたのだが、考えれば考えるほどに不可解過ぎて文字通りパニックに陥り、体をピクリとも動かさずに固まっていた。

何故ってここは屋上で、この学校は四階建てだ。

つまり、この男はこの四階建ての学校の壁を登って屋上に来たことになる。何せ、男はフェンスの向こう側から来たのだから。

俺が無意識に呟いていた言葉を聞き、男はビクリと体を震わせた。

「あ？こいつ、俺が見える？・・・いや、あり得ないな。さて帰るか」

だがそのまま帰ろうと、踵を返してジャンプする態勢になる。

つまり、こちらから見れば自殺に等しい訳で・・・

「え、待って待って、早まるな！！」と言って必死に男の服を引っ張っていた。

男は「うお！？」と声を上げると俺が引っ張った方向に倒れた。

だが、人間と思えないような動きでクルリと回転すると、ストーンと綺麗に着地したのだった。

「だ、だめだろ。まだ自殺なんて・・・！！！」

「自殺？」

男は訝しげな顔を浮かべて俺を睨んだ。男の視線が痛いのはこの際  
気にしない。

俺は必死に男の自殺を止めるべく、現状整理を試みている。

「自殺だろ？ここ四階だぞ？何考えてんだよ！！」

俺は尚も必死に男に怒鳴りつけると、男は眉を潜めた。

「まだ若いんだしさ、命を大切に」

「つつかさ」

男は俺の必死な説得を綺麗に遮り、問題発言となる言葉を発して  
いた。

「お前、何で俺が見えんの？」

「こうして俺はウラの世界に引きずり込まれたのだ。」

## ウラの人間（後書き）

こんにちは、ねんです。

まだまだ未熟者ですが、これから頑張っていこうと思います。  
よろしくお願いします。

## ウラの能力

誰か嘘だと言ってくれ。

生まれてこのかた、幽霊なんて見たことがない。

黒い煙のようなモノは散々見てきたが、どれも人間の姿にはなれなかったし、喋りもしなかった。世の中に、一般の人が見ることできないモノがその『闇』以外に存在することを知らなかった。

また一つ賢くなった。と、冗談はさておき、現状整理を試みよう。

目の前に立つ男が俺を睨み、今俺は絶体絶命。

この男は先ほど、触ろうとした『闇』を燃やしたと思われる。

炎を発生させたのがこの男とは限らないのだが、行動といい、タイミングといい、多分俺の予想は正しいだろう。

『闇』に触ろうとしたから罰が当たったのだろうか。そうでないといいなあ、と思っていると、男は更に眉を潜めてこう言う。

「なるほど、素材シユか。しかも性能がよさそうだな」

「リツ・・・ツ・・・？」

聞き慣れない言葉を口に出しながら俺の顔を覗きこむと、男はふいと踵を返し再びフェンスに飛び乗る。

そして顔をこっちに向けて「近いうちに迎えに行くから待ってる」と意味深な言葉を残して屋上から飛び降りた。

もちろん、俺の目の前で。

何度も言うがここは屋上だ。

いくら相手が人間じゃない（仮）としても、心配してしまうのが俺

の性格。

急いでフェンスに手をかけると、体を乗り出して下を見る　　が、  
死体なんてあるわけもなく、あの男は忽然と消えていた。

「なんだ・・・？今の・・・」

そう呟くこと以外、今の俺にはできなかった。

暫くぼうつと突っ立っていると、背中にトンと衝撃があった。

ハツと我に返ったように後ろを振り向くと、友人の優樹ゆうきが手をひら  
ひらさせて笑っていた。

「また、なんかいたのか？」

こいつは俺の最大の理解者である、唯一の友人だった。

俺の変な（見えるはずのないモノが見える）体質を知って尚、笑っ  
て隣にいる奴だ。

幼馴染で幼い頃から何かと支えてくれたのだ。俺は優樹にしてもし  
切れない程の感謝をしている。

「ああ、まあ」

だからこそ言えない。

今までとは違う、人間の姿をした幽霊（仮）に会ってしまったなん  
で。

そしてそいつに「近いうちに迎えに行く」宣言をされてしまったな  
んて。

そんな宣言、冥土へ連れて行くとも言っているようなものだ、幽  
霊なんだから。

それを聞いたら優樹は絶対、俺を助けようと首を突っ込む。

これは単なる直感だが、巻き込みではいけない気がした。

巻き込みでは優樹が危ないと、そう感じたのだ。

「ま、気をつけなよ？玲哉が相手にしてる奴らは皆、危険がないなんて言えないんだからさ」

「わかつてらあ」

心配をしていることはわかる。優樹は昔からそう言う奴だから。

超お人好しで、笑顔を絶やさなくて、俺の隣でいつも馬鹿をやっている。そんな優樹にいつも救われた。

だからこそ俺のことには巻き込みたくない。その想いは強く、俺はぶっきら棒に答えた。

優樹は俺の返し方に納得はいかないようだったが、それでも干渉しまいと「じゃあね」と行って屋上を出た。

俺は優樹の背中を見つめ、やがて目を伏せた。

\*\*\*\*\*

「この学校に、ですか？」

「そつだ、屋上にいた」

会話をするのは、先ほど玲哉の前に現れた特徴的な髪型をした男と、幼さが残る顔に小柄な体型の少年。少年は顔の割に大人の雰囲気を漂わせ、仕草や口調がやけに大人びていた。

その隣では黒髪に眼鏡をかけた少年が、男と少年の会話を聞いているた。

「僕は反対ですよ、何故オモテの人間を僕らの仲間に  
ド・ライ  
鬼衆に入れなければいけないんですか？オモテの人間？なんか？が  
生き延びられるはずがない」  
・・百<sup>リ</sup>

「そつは言ってもなあ、『あれ』は相当良い素材だぞ？」  
シム

「黙ってください、役立たず。貴方のせいで、ミツたちと合流し損ねたんですよ？」

「ヤツ・・役立たずだと？オイ、ハク・・・お前、今すぐ焼き殺し

「てやろうか」

「やれるものならやってみてください？カナ？ちゃん？」

ハクと呼ばれた少年は実にわかりやすい挑発をし、男　　カナは易々とそれに乗ってしまった。

全てはハクの思いつきである。

カナがあきらかに一見で年上だとわかるのだが、これではどっちが大人なのかかったものではない。

眼鏡をかけた少年　　サトは、おもむろにため息をつくとき、二人の間に割って入った。

「ちよつと、今は任務中だよ？」

「チツ・・・」

カナは派手に舌打ちをすると、ふいつと顔を背けた。

一方ハクはつまらないと言ったような顔でサトに顔を向けた。

いつも通りだ。ハクとカナはいつもこんな感じなのだ。

顔を合わせてはハクはカナをからかい、カナはそれに腹を立てて喧嘩が始まる。

それを止めるのは周りにいる人間なのだ。

ハクは冷静さを保っているが、喧嘩自体を楽しんでいるのだから、周りはいい迷惑だ。

二人の様子にサトは「まったく」と再びため息をつくとき「それじゃあ」と話を切り出した。

「素材リッツのことはハクに任せな。カナは僕と一緒に本部に戻ろう」

「・・・わかった」

「わかりました」

カナはまだ不満そうに顔を歪めるが、どうやら異論はできそうにない。

サトは既に歩き出し、ハクはもうどこにも見当たらなかった。相変わらず行動が速いな、と思っていると、サトが振り返って「早くしてよ」と催促した。

カナは返事をしてサトに追いつき、二人並んで歩いた。

「それで？どうなの、実のところ」

「素材リッツのことか？」

「そう。能力デルターは判明してるの？」

「してねエ、けどなんか・・・違エんだ」

「違う？何が？」

サトは首を傾げた。

カナの雰囲気少し違う気がしたからだ。

カナは目を逸らして口を閉ざしていたが、やがてふっつと息をついて口を開いた。

「それがな

」

\*\*\*\*\*

眠くなってきた。

あれからすぐに寮に戻り椅子に座っていたのだが、寮に戻っても何もすることがなく、日の光に当たっていると段々と暖かくなっていく。

さすがに眠気には耐えられず、ベッドに吸い寄せられるように歩いた。

カタン

静まり返っていた部屋に突然響いた物音、俺はピタリと足を止めて辺りを見回す。

するとそこにいたのは茶髪の少年、幼顔で俺より年下に見える。

少年は二階建ての寮の窓の外から悠々と入り、何事もなかったように俺に話しかけた。

「あなたが、素材リッツですか？」

デジャヴと思いながら少年を見る。

多分こいつもあの男と同じ類たぐいなのだろう、四階建ての屋上から落ちても平気だった（多分）あの男と。

そしてまたもあの男と一致する。あの男が言った言葉、『リッツ』とは一体なんなんだ？

「リッツ？さっきの男、お前の仲間か？」

「カナのことですか？」

少年は途端に眉を潜め、嫌そうな顔をする。

どうやらあの男はカナと言うようだ。

「あの役立たずなら帰りましたよ、それよりやはり僕の姿が見えるんですね」

少年のやけに大人びた口調に息を呑む。

男 カナを？役立たず？とハッキリ言う辺り、この少年はカナを見下している。

暫くすると、少年の雰囲気が変わった。

こんなに顔立ちは幼いのに、その瞳から見える光は鋭く、冷たい。

こんな目、大人にだってそうできるものじゃない。

この少年は一体何なのだろうと思っていると、少年はクスクスと笑

った。

「・・・死ぬ」

ガツと俺は床に押さえつけられた　・・・と言っても、少年の手によってではなかった。

何も無いのだ。

何も無いのに俺は床に押さえつけられた。

「ぐ・・・う・・・」

苦しくて声が漏れる。

首を絞められている、でも見えない。何に締められている？何に俺は殺されそうなんだ？

恐らく犯人は、目の前で微動だにせず怪しく笑う少年、こいつがそうさせているのだろう。

カナが炎を操ったように、この少年も。

体がどんどん動かなくなる。

意識がかすみ、少年を睨むことも儘ならなくなる。

抵抗するにも何に抵抗すればいいのかわからない。

もがくこともできなくなり、ぐったりと力をなくした。

ギリギリと首が力で押さえられる。

少年はクスリと笑うと、くるりと俺に背を向けて窓と向かい合った。

「やはり、能力者フロウと素材リッツじゃあ・・・勝ち目はない、ですか」

少年は言葉を残して窓から去ろうとした

正確には去ろうと窓に手をかけた。

ザワリ、ザワリ、ザワリザワリザワリ

バツと振り向き、仰向けに倒れる『玲哉』の体を見る。  
気のせいか？何か殺気のようなモノを感じた気がした。  
背筋が凍りつくという表現はあながち間違っていない。  
背筋、と言うよりは体中が凍りついて動かない気がしたのだ。

少年が息をつくと、むくりと『玲哉』の体が起き上った。

## ウラの在り様

何が起きた？

「まだ、動けたんですか」

先ほどの殺気は？何故、気絶させた人間が立つ？

「所詮は能力が使えない素材<sup>デルター</sup>。大人しくしていればよかったのに、残念ですね」

・・・違う。

ジトリと汗が手に滲んでいるのはわかっていた。

ハク自身、『これら』が強がりだと言うことも、理解していたのだ。形勢は完全に覆された。

思い込もうと口に出す強がり、体中で否定している。そして、警告をしている。

こいつは危ない、と。

目の前で起き上る少年　玲哉は、先ほどとは？違って？いた。

先ほどはもつと無力だったはず、何もできずに気絶させたはず。なのに起き上った。

起き上ったときにはもう別人だった。

「くくく・・・あは、はははは、はは・・・ははは！・・・！」

不気味な高笑い、部屋を埋め尽くす。

ハクは目の前で叫ぶように笑う玲哉を見つめ、現状把握を試みていた。

先ほどの玲哉と違うのはわかった。だが、何があったと言うのだから。

うか。

訳がわからず動揺を隠せずにいると、いきなりハクの体がふわりと宙を浮かび、そのまま壁に叩きつけられる。

「ツ……うぐ……う」

声にならない呻き声が漏れる。視界が霞み、前がよく見えない。壁に叩きつけられ、床へ倒れ込むハクはまるで人形のようにだった。抵抗さえできない、する暇を与えられない。

ただただ圧倒的な力の差を見せつけられ、全身で絶望を感じる。

「哀れ」

玲哉が呟いた。

ハクは辛うじて意識を保っているようで目を薄ら開けるが、視界が霞んでいるせいで玲哉の顔は見えない。

ただ目の前にいる玲哉の声は、先ほどとは違って鋭く冷たいモノであり、情など欠片も存在しないようだった。

「哀れな餓鬼<sup>がき</sup>」

再び玲哉が言った。

その瞬間、体がズツと重くなった。

うつ伏せに倒れていても体が圧迫されるように重く、呼吸をしているのが段々と辛くなる。

「自分の力を過信し、隙を見せたことを後悔しろ」  
何を言っているのだ、と思う。

先ほどまで自分は優位に立っていたのだ。

抵抗の素振りを感じられず、才能も感じる事ができなかった玲哉を殺そうとした。

殺せるはずだったのだ。なのに、『こいつ』に邪魔された。『こいつ』は間違いなく別人だ、玲哉ではない。

「<sup>ワタシ</sup>私の器を壊そうとした報いだ、そのまま死ぬ」

冷たく見下ろす『玲哉』を睨んだ。

圧迫する力が肺を押さえつけ、ハクは呼吸することさえ儘ならない状態だった。

動くこともできず、目の前で不敵に笑う『玲哉』の声を、聞くだけだ。

玲哉はスツと目を細めると、拳を上げた。

その動作だけで、何か来るのは一目瞭然だ。

次、『玲哉』が何かを繰り出すときは、自分は死ぬ。

そう直感した。

勝ち目はない、勝てるはずがない。と、ハク自信わかっていた。

苦しさが、呼吸を荒立たせる。

・・・どうせは、捨てた命だ。

そう割り切って瞼を閉じた。

このままジツとしていれば、『玲哉』が自分を殺す筈だと。

だが、いつまで経ってもそのときは来なかった。ハクは重い瞼を開けた。

「ハク、大丈夫？」

ニコリと笑うサトの顔が視界に入った。

続いてカナが見える。

カナは能力デルターではなく、素手で応戦している。

さすがに生身の人間（玲哉）は燃やせないのだろう。

「無事か!？」

カナは『玲哉』の相手をしながらこちらを見る。

ハクは照れ隠しに顔を背け、それから「助けてもらわなくても、無事ですけど?」と強がった。

「可愛くねエの」と呟くカナを他所に、サトはハクを立たせる。

あの圧迫するような体の重みは既になくなっていた。

サトはハクを支えながら「ハクの気配と一緒に、大きい影ロストの力が感じられたから」と笑う。

正直、命拾いをした。

「しかし、あれは何?影ロストにしては強力すぎる」

「わかりません。素材リッツを処分しようとしたら、急に?ああ?なってしまっ

た。サトの言葉に、ハクは首を傾げた。

ハク自身も何がどうなっているのか、何もわからない状況だ。

聞かれても、急に人間が影ロストのようになってしまったとしか答えられない。

「あの子が素材リッツ?」

「ええ。『さつき』は、ですけ」

ハクの言葉が途切れる。ハクの目の前をカナの体が横切ったからだ。ハクと同じように、カナも投げられてしまったみたいだ

人形みたいに。

「ゲホツ・・・ガツ・・・」

カナはそのまま倒れ込み、長い間むせた。  
カナを追いかけるように、『玲哉』がゆっくりと歩を進める。

ゆっくり、ゆっくり。

その一歩一歩が死へのカウントダウンに見えた。

「戯れも飽きた」

『玲哉』がニイツと笑った。その笑顔は、何よりも冷たく残酷に見えた。

「三人まとめて殺す・・・」

『玲哉』はニイツと笑って口を開く。

だが、そのあとキョロキョロと辺りを見回した。

そしてクツと笑うと、「まだ、時期じゃない。糞餓鬼に感謝しろ」と吐き捨てる。

途端『玲哉』は倒れ込み、そのまま動かなくなった。

三人は呆然と玲哉の体を見つめ、それからふう・・・と息をついた。

・・・生きてる。

命があることに悔やみ、喜ぶ。矛盾しているが、そんな感じなのだ。

「羅刹！！」

何かを叫びながら部屋に入ってくる見覚えのある金髪の青年は、辺りを見回して安堵の息を漏らした。

「無事、だったんだね」

「オ・・・ナ・・・」

力が抜けて、声が思うようにならない。

オーナーと呼ばれた青年は、眉を下げて苦笑し「部屋、ボロボロだ」と今はどうでもいいようなことを言った。

でも、確かにボロボロだ。

この部屋は元々玲哉の寮部屋だが、戦闘の後だからだ  
・・悲  
惨な状況になっている。

「ハク、サト、カナ。すぐ駆け付けられなくてごめんね」  
オーナーは深々と頭を下げた。

サトは笑って「いいですよ」とオーナーを宥めた。

実際、オーナーのせいではない。

全部、不甲斐なかつた自分のせいなのだとハクは思った。  
油断したせいだ。

勝ったと思つたせいだ。

だから、隙を突かれた。

ハクはギリツと歯を食いしばる。

「ああ、突然の来客に驚いて、帽子被るの忘れてた」

オーナーはそう言つと、懐から可愛らしいボンボンがついた真っ白な帽子を出して被つた。

カナはそれを見て「いい年こいて・・・」と呟いていたが、いつものことだ。

「ん・・・」

玲哉がもぞりと動き、目を覚ます。

「あ、幽霊」

玲哉がぼそりと呟いた言葉は、カナに向けられた言葉だった。カナは、玲哉がカナを幽霊だと思っていると知り、苦笑した。

「あのな？俺は幽霊じゃねえよ」

「じゃあ、何者？炎、操ってたよな。四階建ての屋上に、素手で上ってきたし」

「俺はな　　・・・」

「そこからは俺が説明するよ」

カナの言葉を遮ったのは、オーナーだった。

オーナーはその場にしゃがむと、ニコリと笑って玲哉を見た。

「単刀直入に言うね。キミは素材シツで、これからある秘密組織に入らなければいけない」

「は？」

唐突に出たオーナーの言葉に、玲哉は呆然とするしかできなかった。

## ウラの組織

意味がわからない。

意識がいつの間になくなっていて、重い瞼を持ち上げれば見覚えのない人間がちらほら。その中には先ほどの幽霊（仮）も混ざっていた。そしてその隣を見れば、傷だらけになっている先ほどの少年もいた。先ほどは何故か俺を殺そうと、奇妙な能力を操っていたが、今はその意思はないようだ。無意識に安堵の息を漏らした。

そう言えば、俺を殺そうとしたとき少年が、あの幽霊（仮）をカナと呼んでいた気がする。

そして、容姿に似合わない、可愛らしいボンボンがついた真っ白なニット帽を被る青年が目の前にいる。ニット帽を被る青年は、俺の目の前でしゃがみ、視線を揃える。

そして、訳の分からない言葉を発した。

？キミは素材リッツで、これからある秘密組織に入らなければいけない？

「組織・・・？」

「そう、組織だ」

よく見れば俺の部屋がボロボロだった。何かに荒らされたように机が破壊され、壁も大きなヒビが入っている。ここで何があったと言  
うのだ。

「キミは、どれくらい『ウラ』を知ってる？」

「ウラ？」

「オーナー、この素材は何も知りません」

俺が聞き返すと、傷だらけの少年が青年に付け足しをする。

青年はオーナーと呼ばれているようだ。

先ほどから言っているこの単語 『リッツ』とは何なのだろうか。

「素材<sup>リッツ</sup>って言うのは、能力の素質はあるけど、その能力を使いこなすことができない人のこと。そして能力を操り、自分の力として発揮できる人のことを俺らは能力者<sup>フロウ</sup>と呼ぶんだ」

オーナーはまるで心を読んでいるかのように、『リッツ』について簡単に説明をした。

俺は思っていたことが筒抜けになっていることに動揺し、目を瞬かせた。

オーナーはその状況に笑って、それから言った。

「キミは影<sup>ロスト</sup>が見えるんだね」

「ロスト・・・」

「キミたち、オモテの人間で言う、幽霊みたいなモノかな？見えてるんでしょ？他の人には見えない、黒く澱んだ、得体の知れない闇のようなモノが」

俺はこくりと頷く。

この人は、俺と同じ『影』を見ている、それらの存在を知っている。それを知っただけで嬉しくなった。

俺が見ていたそれらは、本当にあったのだと証明できるのだから。俺がおかしくなってしまうわけではないと、わかったのだから。

「影<sup>ロスト</sup>は放っておくと空間を崩壊させてしまうんだ。人間が生存することができ、この空間を。まあ、イメージは辛いだろうけど、後々感覚で覚えていけばいいから」

「あの・・・俺がその、アナタが言う組織に入らなきゃいけないってのは？」

「キミがウラ　　つまり影ロストの存在を知っている時点で、組織に入るのは必然なんだ」

「その組織って・・・？」  
質問をする声が小さくなるのがわかる。

不安なのだ。今まで俺自身が存在していた世界が、今まで知った世界が　　今この瞬間、全ての常識が入れ替わろうとしているこの事実。

ロスト影の存在は知っていた、もちろん視覚的にだが。

でもそれらがどんなモノで、害を及ぼすかどうかなんて、知る筈もなかった。

誰も見える人がいないのだから。

だけど今出会った。

「国に認められたウラの組織　　・・百鬼衆リノド・ライ」

「国に？」

「ああ、国はこの組織の存在を知っている」

と言うことは、俺たち国民だけがそれを知らされていないと言うことだ。

国は影ロストの存在も、不思議な能力の存在も、この組織も、全てを国民に隠している。

良く言えばウラで護られている。悪く言えば　　恐らく、都合の良いように騙している。

「オモテの人間が知ることはない会社、百鬼衆リノド・ライ。この子たちはその

社員なんだ」

オーナーは、後ろで黙って話を聞いている、傷だらけの少年、特徴的な髪型の身長の高いカナと呼ばれる男、黒髪の俺と同じ年くらいの眼鏡の少年を指差して笑った。

「百鬼衆は、影を消すことを目的として存在する組織なんだ。そしてその役割のほとんどを担っている能力者に、キミもなれると言うことだよ」

「は？」

「俺らは能力のことを『デルター』って呼んでるんだけどね。要するにキミは、能力を持っていてるんだ。キミを見る限り、まだ覚醒はしていないんだろうけど」

「なんツ・・・そんなことが、わかるん・・・だ」

動揺しているのがわかった。

要するに、俺はオモテの人間ではない。

正確に言うと、俺はその存在を知っている時点でオモテではなく、ウラの人間になっていたのだ。

無自覚なだけに、動揺が大きかった。

オーナーは全てを見透かしたように笑うと、俺を見据えて言った。

「俺たち同業者は、能力を感じることが出来る。特に、力を制御ができないキミみたいな素材はね、能力から発する電波のようなモノを無意識に放ってるんだ。だから素材はとも見つけやすいんだよ」

「で、電波ツ！？」

いつの間にそんなモノが出ていたのだ、と無意識に体をこわばらせた。

「キミは素材で、影が見える。ちょっと訓練すれば、すぐ能力を使

いこなせるようになるよ。片方が備わっていることはあるけど、両方は稀にしかない。さあ、それじゃあ本部に行って早速入社手続きをしよう?」

オーナーはぐいぐい俺の手を引つ張って、俺のことなんか気にもしない。

ある意味、自由奔放な人だ。

カナはそれを見て苦笑し、傷だらけの少年は相変わらず俺を睨み、黒髪で眼鏡の少年は呆れてため息をついていた。

「ちょっ・待って!アンタ何者!?!」

オーナーの自分勝手な行動を制止しようと、言葉で行動を遮った。オーナーはキョトンとして俺を見て、それからヘラリと笑うと言った。

「ああ、まだ自己紹介をしてなかったなあ。俺は百鬼衆リノド・ライアジア支部長、気軽に『オーナー』って呼んでね」

「オーナー」は多分本名ではない。だが、本名を教えてくれる雰囲気でもない。結論として、大人しくそう呼ぶことにした。

「そこで仁王立ちしてる大きな栗色の髪の人が『カナ』、拗ねてる茶髪の男の子が『ハク』で、眼鏡の男の子が『サト』」

「拗ねてません」

「拗ねてるじゃん、むっつりしちゃって」

ぶツとカナが盛大に吹き、サトと呼ばれた少年も肩を震わせている。ハクは仏頂面が更に険しくなった。

オーナーはそんなハクに怯まず、俺を見てクスリと笑って言った。

「さあ、じゃあ行こうか」

えらいことになってしまった。

## ウラの事情

正直、まだわからないことが多かった。

とりあえず言っておくが、俺は頭が悪い。授業に出ていないと言うことも大きいが、まず素材がよろしくないのだ。

そのため、何を言われても理解できない。

だがそんな俺も理解したことが一つ。

危ないところに足を踏み込んでしまった、ということだ。

更に言うなら、とても現実離れたところに足を突っ込んでしまった。

しかし、更なる事実。

ウラの世界があるから、オモテが平和であると言うことだ。

オモテの世界と言うのは、俺が今まで居座っていた平和ボケした場所。

そしてウラというのは、『<sup>ロスト</sup>影』や『<sup>デルター</sup>能力』と言った、現実離れをした常識を持ち得ている世界。

そして俺はそこに踏み込もうとしているのだ。

それは半ば強制であるらしい。

オーナーは、影<sup>ロスト</sup>を見ることが出来る人や、能力を持ち得ている素材<sup>リッツ</sup>は嫌でもウラに入らなければいけないと言っていた。それがウラの常識なのだ、と。

そしてオモテにとっては、ウラは絶対に知られてはいけない存在らしい。

俺は両方を生まれつき持っていたのだが、ウラに入る当初は大体は能力はあるが、影<sup>ロスト</sup>を見ることのできないという人間が多いらしい。(それか影<sup>ロスト</sup>は見えるが、素材<sup>リッツ</sup>ではないという例)

オーナーは、その点では俺は運がいいと言っていた。<sup>ロスト</sup>影は訓練をすれば見ることができると言っていたが、能力<sup>デルター</sup>は訓練をしても手に入れない。

そう言った人間は、ウラに入った上でサポーターとして百鬼衆<sup>リノド・ライ</sup>で働くらしい。

もちろん資金は国から出るため、お金には困らない。寧ろ働けば収入が多く、裕福な暮らしができる。

命を賭けると言ってもおかしくない仕事だからだ。

「な、なあ。どこ行くんだ？」

「さつきから言ってるじゃん、百鬼衆<sup>リノド・ライ</sup>の本部だよ」

オーナーはニコリと笑って、俺の不安を更なる不安へと変えた。

「いやいや、あの部屋をあのままにしていいいの？」

何があつたかわからないが、気が付いたら酷く荒れていた俺の部屋を思い浮かべた。

人が来たら、大騒ぎになる筈だ。

だがオーナーは笑顔を欠片も乱さず、淡々と言った。

「大丈夫。『修復』<sup>デルター</sup>の能力の子に、直すように言ったから。帰る頃には元に戻ってるよ」

「さ、さすが」

さすがウラの組織の人間だ。

対応の仕方、オモテの常識をことごとく覆していく。

「うるさいですね、黙って歩いてください」

そう言うハクは、ギロリと俺を睨んだ。

どうしてこうも、ハクは敵意を持つのだろうか。

そう思いながら歩いていくと、ふと周りを見渡した。見慣れたところに着いてしまった。

「ん？ここって・・・」

ここは体育館倉庫だった。

オーナーは何の躊躇いもなく勢いよく倉庫の扉を開けると、中に入っていた。

続いてハク、カナ、サトの順に入っていく。こんな狭い所にどうして入るのだろうか、と思いながらも思い切って入ってみることにした。

足を踏み入れると、それと同時に埃臭いニオイが鼻の奥まで入り、むせてしまった。

外とは違って真っ暗な場所だ。

「倉庫、閉めといて。あとで誰かが来ても厄介だから」

オーナーはそう言うと、ガサゴソと何かをし始めた。

俺はそれに素直に従い、オーナーがいるであろう方向を見つめた。

真っ暗なためにオーナーや他の三人は見えないが、何をするのかと耳を澄ましていると、薄ら光が見えた。

その光は外の光ではない。

倉庫の中にあつた古いロッカーの扉の向こうから、光が見えているのだ。

恐らく、オーナーが扉を開けたのだろう。

これで、先ほどよりも倉庫内が見えるようになった。だが、何故光が？

と、呑気に思っていると、オーナーはいきなりその中へ入っていった。

そして、さも当たり前のようにカナとハクも入っていく。

現状に追いついていけず、一人取り残されるのかと思っていると、サトがこちらを向いて苦笑した。

「ここ、本部に通じる門ゲートなんだ。他にも場所ごとに設置されているんだけどね、万が一オモテの人間が開けてしまっても、見る力がな  
い人には影響がないようになってるから大丈夫なんだ。認識、され  
てないからね」

「へえ」

「初めてだと躊躇ったりするかもしれないけど、案外平気になるか  
ら」

サトはそう言っただけでロッカーの中に入っていった。

気を遣ってくれたのだろうか？初めて門ゲートとやらに入る俺に。

それとも、あまりにも不憫だからと声を掛けてくれたのだろうか？  
どちらにしても、少し気が楽になった。

俺は決心をすると、思い切って飛び込んだ。

「ぐえッ」

ぐえ？何か聞いたことのある声が、苦しそうにしている。  
気付いたら倒れていた。

ゆっくりと起き上がると、下は床ではなかった。見えるのは  
・

・カナの背中？

「ちょッ・・・お前マジでなんなんだ？早くどけ、苦しい」

「マヌケですねえ、どっちも」

苦しむカナと、咳くハク。

俺はその咳きを聞いていたが、あえて聞かない振りをする。

どうやら門ゲートに勢いよく入ったため、カナの上に勢いよく落ちてきてしまったらしい。

俺はカナの上から降りると、辺りを見回した。立派な建物だ。

学校の体育館の十倍はあるこの場所も、建物の一部らしい。立派な装飾も、大きく綺麗なこの広場も、何もかもがウラの世界の壮大さを物語っていた。

周りを見て感心していると、突然グニヤリと視界が歪み、吐き気が襲った。

頭には破裂しそうなくらい圧迫した痛み、劈くような耳鳴り。苦しさを自然と息が荒くなった。

「どうしたの？」

オーナーが俺の顔を覗くが、オーナーの顔も霞んで見える。

声色はどうやら俺を心配しているようだ。三人の視線も痛く感じる気がする。

「何でも、ない」

「・・・ああ、そうだ。そういえば、キミは門ゲートを通るのは初めてだったね。空間に穴を開けて、空間と空間の間を通るから、初めてだと耐性ができてなくて苦しくなるんだ」

オーナーは思い出すように言った。

そう言うことは始めに言って欲しいよ、と心の中で悪態づくが、苦しきは変わらない。

俺は項垂れながら、地面に膝をついた。

すると、どこからか声が聞こえてきた。

小さな女の子の叫び声だ。しかし、肝心の女の子がどこにもいない。

声は上から聞こえてくるのに　　・ん？上から？

「オオオ　　ナアアア　　！！！！！」

「え？」

オーナーは呼ばれた声に呆けた顔で上を見上げると、突然降ってきた何かに潰されて倒れた。

オーナーが「ぐぼツ」と不気味な声を出して床に押し付けられると、落ちてきた何かは「オコのうさぎちゃんがああ」と嗚咽と共に泣いていた。

・・・落ちてきたのは、前髪にピンをつける小さな少女だった。

しかしこの少女が本当に落ちてきたのだろうか。と言うか、どこから？

疑問に思い、少女が落ちてきた場所を見つけようと上を見上げるが、人間が直接降りてこられそうな場所はなく、唯一飛び降りられそうな場所は、俺の学校の四階建ての屋上くらい高いところだった。

あり得ないあり得ない。

こんな小さくて細い子供があんなところから？落ちてきて無傷？

「オコ、どこからでてきたの・・・」

オーナーが力なく言うと、オコと呼ばれた少女は先ほど俺が、あり得ないだろうと考えた場所を指差し「あそこから・・・」と弱々しい声で告げた。

「嘘だろ・・・」

俺は動揺を隠せず乾いた笑いを零すと、オコはこちらを見て実に

素直に、訝しげな表情を固めた。

オコはオーナーにしがみ付き、それから「不審者」と呟いた。

「え、俺？」

俺はいきなりのこと何を言ったらいいかわからず、とりあえず苦笑した。

すると、遠くから少女が走ってきた。

と言っても、見るからにオコよりもずっと年上で、俺と同じくらいの歳の、やけに細く現実離れた綺麗な少女。

俗に言う美少女。

「すみません、オーナー。オコ、少し目を離したらいなくなってる。．．」

少女は人懐っこい笑顔を浮かべながら、オコを抱き上げる。

その仕草はもう慣れたモノで、動作だけでこれらは日常茶飯事なのだと言ったことがわかった。

オコは声をあげて無邪気に笑うと、少女にすっかりとしがみ付いた。少女は肩まである真っ直ぐな黒髪を耳にかけると、ふと俺に視線を移した。

俺が視線のやり場に困っていると、少女はニコリと笑って「新入社員？」と聞いた。

その言葉に反応したオーナーは少しせき込んで、それから俺の背中に手を添えた。

「うん。丁度チームが集まってくれたことだし、紹介するね」この場にいた六人（俺も含めて）が、オーナーに注目した。

「この子はレイ、歳はサト、ミツと一緒にだね。レイは今日から、キミたちの十三班に入ってもらおう。チームメイトとして、彼にいろいろと教えてあげてね」

「レイ？」

「ここではね、本当の名前じゃなくて、ニックネームで名前を呼ぶんだ。それがここ、百鬼衆リノド・ライの決まりの一つさ」

ああ、なるほど。何故だかはわからないけど、俺は『玲哉』だから『レイ』なのか。

じゃあ、サト、ハク、カナ、オコも本名じゃなかったのか。

「ミツって・・・」

ふとオーナーから出た言葉を思い出し、口に出す。

すると、オコを抱えていた少女が「私のことだよ」と笑った。

ミツと名乗る少女は、同い年だと言うのに大人のような雰囲気を感じていた。

落ち着いた口調に柔らかい笑顔。

「十三班って言うてたよな」

「これからレイは十三班で、百鬼衆リノド・ライの社員として任務を受けるんだ」  
オーナーはニコリと笑うと、俺を見た。

オーナーが笑うところを見ると、怒ることなんてないんだろうな、と錯覚してしまう。オーナーの笑顔はそれ程安心できる、優しい顔だった。

「百鬼衆リノド・ライの存在理由は知ってるよね」

「確か、影を消すこと・・・だったよな」  
ロスト

「そう、そしてそれを行うのは、キミたち能力者だ。チームフロウを組んで、任務として本部を離れて遂行する。カナたちがキミの学校にいたのも、任務の為だったんだ」

「なるほど」

だからカナは炎を操って、俺が触ろうとした影ロストを消したのか。

「・・・あれ、それじゃあカナの能力デルターは『炎』？」

「ああ、まあな」

「ちなみにオコは『読心術』と『身体強化』だ。稀にだけど、能力を二つ持つてる人間もいる。オコはその一人だよ」

「そうなのー！オコは二つ持つてるのー！！」

元気に反応し、自分の話題が出たことに喜んだオコは、その場でとび跳ねた。

さすが『身体強化』の能力を持つオコだ。

とび跳ねる姿は普通の少女と変わりが、とび跳ねた高さは軽く三メートルを超しているだろう。

そして先ほどの事件も合致がいった。

オコが強靱な高さから落ちてきたのにもかかわらず無傷なのは、『身体強化』の能力があったからだ。

わかっていても、先ほどのオコを思い出して身震いした。

こんな小さい子があんな高さから落ちてくるのを、目の当たりにする日が来るなんて。

もう一つの能力は『読心術』だと言っていた。

『読心術』って言うと、心を読むと言うことか。

「心を読むのか。何か、恥ずかしいな」

無邪気な少女には変わりのないのだが、心の内が見えてしまうとなると少し恥ずかしい。

それを聞いたオーナーは微笑んで、「大丈夫、この子は幼いけど立派な能力者だよ。」

能力を操れるから、普段は心を読まない」と言った。

「オコ？」

ミツがオコを呼ぶ。

だがオコは、先ほどの元気な動きとは打って変わって、ミツの後ろに大人しく隠れてしまった。  
何があったと言うのだろうか。

オナーはそんなオコの頭を撫で、「大丈夫だよ、オコ。レイはキミを嫌わない」と安心させるような優しい声色で言った。

オコはそれを聞いて、ミツの後ろから少し顔を出した。

「ごめんね。オコ、昔『読心術』で嫌な思いしたことあって」

・・嫌な思い。

俺が生まれつき見えてしまった影。ロスト

それらの存在を周りが既に認識していると思っていたのに、周りは見えていなかった。

周りの蔑むような、異質を見るような目を見るのが嫌だった。怖かった。

誰も自分を『普通』だと見てくれない。『普通』ってなんだ？俺は『普通』にしているのに。

昔の俺と同じようなモノなのだろうか。

だっただとしたら少し　　・・親近感が湧くな。

俺はオコに近付き、頭を撫でた。オコは驚いて大きな目を見開き、それから俺を見た。

「俺も同じ、だから怖がらないで？」

唐突に紡がれた俺の言葉。だが、オコには多分伝わっていた。

『俺も嫌われるのは怖い、同じだよ』

周りからの視線が怖かった。

でも今は普通にしていられる。

だって、影を見ることのできる人を見つけたから。

俺がおかしくなったわけではない。

俺が嘘をついていたわけではないと証明することができたから、安心できた。

『俺はオコを嫌わないから、怖がらないで』

俺はそつとオコに念じる。

オコはハッと俺の顔を見つめると、それからパアッと顔を明るくした。

「レイ、好きい!!」

そのままオコは、俺の懐に飛び込んできた。

・・・さすが、『身体強化』だ。

飛び込んだオコは、俺の腹に頭突きを食らわせた。

姿が普通の弱々しい少女だっただけに、油断していたのだ。

オコはケタケタと笑い、俺に抱きついた。

俺は腹に走る痛みには耐えながら、顔を青くしながら笑った。

## ウラの危険

「あらま、オコ懐いちゃったよ」

オーナーが目を丸くした。

俺はオコの頭突きを尚も食らいながら、オーナーに目を向ける。

「オコは知らない人には懐かないんだけどな」

「それほど、レイが良い人だってことじゃないですか？オーナー」  
ミツも少し驚いていたが、やがて微笑みを含んだ表情をオコに向ける。

オーナーは「そうだね」と頷くと、くるりと俺たちに背を向けた。

「さてと、俺は仕事が溜まってからもう行かなくちゃ。あと、案内と説明頼んだよ」

「はいはい、どうせ仕事なんてしないだろうけど、いってらっしゃい」

オーナーの言葉に、少し棘を含んだ言葉を浴びせるサトの表情は、冗談を言っているようには見えない。

恐らく、？いつも通り？仕事をしないのだろう。

「んじゃ、説明はサトに任せる。俺ア眠いからな」

「僕も、レイさんは『嫌い』だから任せます」

「ちょッ・・・嫌いを強調するな」

そう言っている間にも、カナとハクは肩を揃えてどこかへ行ってしまう。

ミツはそれを見て「こういうところだけは気が合っただから」と呆れ半分に呟いていた。

残ったのはオコとミツとサト　・・・と俺。

「じゃ、ミツとオコも休んでいいよ。僕が説明しておくから」

サトはニコリと笑って、ミツとオコを交互に見る。

「でも」

「ついでに左脚の怪我、治療してもらってきなよ」

何か反論を紡ごうとするミツの言葉を遮り、最後の一言を言う。

ミツは自分の左脚に視線を向けると、そのままサトを見て苦笑する。

「気付いてたんだ」

「うん、最初からね」

「ごめんね」

ミツはオコを連れて、カナやハクが去っていった方向に歩きだした。そしてそのまま姿が見えなくなると、「さて」とサトは俺の顔を見た。

「どこから、説明すればいいかな？」

「え、いきなりそんなこと言われても……」

唐突過ぎて、何を聞いたらいいいのかわからない。

そう思っ戸惑っていると、サトは微笑み、「焦らなくていいよ」と穏やかに言った。

どうしてこども百鬼衆リンド・ライにいる人は、俺と歳が近いにも関わらず大人っぽいのだろうか。

カナやオコは置いておくとして、皆落ち着きがある。

「能力デルターや素材リッツのことは知ってるよね。じゃあ、晴れてチームメイトになったことだから、僕らの能力デルターを教えておかないとね」

「あ、そうか。そういうえば教えてもらってなかったな」

「僕は『幻』デルターの能力を持つんだ」

「『マボロシ』……ってどんな感じなんだ？」

「どんなって……こんな感じ？」

・ ・ ・ なんだこれ。

気付けば視界全体が花畑になっていた。

さまざまな色が彩られ、更には太陽まで照り輝いている。

サトの姿が見えず、花畑はずっと先まで続いている。

青空は鮮やかに広がり、そこにいるだけで呼吸が軽くなるように感じた。

ちょっと待て。

つい目の前の光景に癒されているが、ここは建物内だった筈。何故太陽が？

そこまで来て思い出す。

これはサトが創りだした幻だと、見えないがそこにサトがいると。

「なるほど、すごいな」

「そう？そう言ってくれると嬉しいなあ」

やっぱりいた。声はするが、やはり姿は見えない。

サトの声が聞こえてすぐ、フツと目の前の景色が跡形もなく消えた。色鮮やかに広がっていた花畑に少し名残惜しさを感じながら、あれらは全て幻だったと割り切った。

「オコとカナは知ってるよね」

「ああ、オコは『身体強化』と『読心術』で、カナは『炎』だよな」

「正解」

「 ・ ・ ・ って、あれ？結局、俺の能力デルターってなんなんだ？」

「それはわからない。時期が来るまでゆっくり待っていれば、いつか発覚するよ」

「俺って本当に能力者フロウなのかあ？」

何の自覚も持てない俺が、少し心配になる。が、サトはそんな俺の心配をあっさりと覆す。

「大丈夫、素材リッツの気配を間違っわけないよ。ちゃんと、気配を纏っ

てるから」

「そうかな」

「うん。それじゃ、ちょっと歩きながら話そうか。広場で立ち話つて言うのも、疲れるし」

サトはそう言うと、皆が歩き去った方向に体を向けて歩き出した。

俺もサトの後を追い、隣を歩く。

改めて感じるのだが、やはりここは百鬼衆リノド・ライ。・・・ウラの組織の本部と言うだけあって、馬鹿でかい。

と言うか、ここ日本だよな。

あまりの建物の大きさに呆けていると、サトは微笑みながら口を開いた。

「じゃあ次はハクの能力デルター。簡単に言えば『念』かな」

「『念』？」

「そう、よく超能力の一種で『念力』ってあるでしょ？その部類に入ると思うよ」

超能力と言えば、オモテの人間でも知っている。だからイメージをしやすかった。

「ただ、ハクの『念』はそれだけじゃない。ハクは『念』を固体化させることもできる」

「固体化って言うത്・・・どういうことだ？」

「ハクは『念』で遠隔操作もできる。ま、一番わかりやすい例で言えは、遠くにあるモノを浮かばせることができるってことかな？」

「ああ、それなら」

超能力の典型的な例である。

手で触れていないが、モノを浮かばせることができるというもの。だが、本当に現実でそれを可能とすることができるなんて、思ってもみなかった。

・・あ。

ハクに初めて会ったとき、首を絞められた。何も無いのに、感触だけが首に食い込んでいた。

？あれ？は『念』を固体化させて、俺の首を絞めたのか。どつりで何も見えなかった筈だ。

「ハクは百鬼衆リノド・ライ内で有名な、？天才？なんだ。ちょうど十五年前にここにいた、ある先輩と同じように、能力者フロウとして優秀な社員なんだよ」

「ある先輩？」

「俺もあまり知らないんだけど、十五年前いきなり百鬼衆リノド・ライに入社してすぐに、難しい任務に出ることができた先輩がいるんだ。名前はトキ。でも今は生きてるかどうかもわからず、行方不明になつてるんだって」

「トキ？それもニツクネームか？」

「多分そうだろうね。本名は明かしてもいいんだけど、基本ここではニツクネーム呼びだからね。ま、この事に関して？だけ？は深く足を踏み込まないほうがいい。百鬼衆リノド・ライのお偉いさんに目をつけられちゃうから」

サトはそこまで言うと、笑った。

「さ、この話は終わり。次は　　・・」

サトが話を切り出そうとしたそのとき、ズズズズズ　　・・と低く嫌な音が建物内に響いた。

今歩くこの場所は、ちょうど訓練場だった。

学校よりも数倍広い、体育館のような建物の出入り口にいたのだ。だが、サトは瞬時に俺の手をぐいっと引いて、訓練場の真ん中に走った。

「ちよつと・・・なんで影が本部内に入り込んだの!？」

サトの顔は動揺で埋め尽くされていた。

それほど、影がここに発生するのが珍しいのか。

サトの問いに答えることもできるわけなく、手を引かれるままに走った。

「困ったな、僕は攻撃型じゃないのに」

訓練場のド真ん中まで俺を連れさせたサトは、俺に「多分気配を追って応援が来るはずだから、レイはここで身を守って」と言って先ほどまで俺たちが立っていた場所を見つめた。  
どうやって身を守ればいいのかだろうか。

ズズ・・・ズズズ

嫌な感じがする。頭の中にまで響き渡るような、嫌な音。

脳が必死に警告している。ここから離れる、と。

「しかも、ランクAって・・・何がどうなってんの？」

サトは顔を引きつらせる。その視線の先には、人の形をした影が見えた。

相変わらず『闇』のように真っ暗で、見ていると気分が悪くなる。

人の形をしているが、気配だけで人間ではないことがわかってしまった。

影には無数の煙のような黒いモノが漂っている。

影は俺たちに段々と近づく。ゆっくり、ゆっくり。

ぞわりと背筋に悪寒が走り、足が動かない。

震えが止まらず、頭の血管は冷水が流れているように冷たかった。

多分これが、俗に言う『パニック』だ。

それでも、それくらい目の前にいる影は恐ろしいモノだと直感して

いたのだ。

《あは、あはは》

影は声をあげて笑った。

その声はまだ幼さが残り、とても可愛らしかった。

だがそれと同時に、何も感じず無情さを語るように冷たかった。

《死んじやえばいいの》

何を言うのだ、この影は。

と言うより、影は喋ることができるのか。

《僕は悪くないのに、退治するの？》

サトは歯を食いしばり、冷や汗を流していた。

頬から顎に汗が伝い、サトの緊張感が俺にもわかってしまった。

それほどこの影は強く、恐怖を感じてしまうのだ。

《僕を勝手に創り出したくせに、勝手に退治するんだ？》

人の形をした影の顔は真つ暗で見えないが、多分こいつは

笑っている。

楽しそうに、嬉しそうに、愉快そうに。

《別に、どうでもいいや》

軽快に笑うと、影は瞬時にサトの腹を殴った。

まだ距離はあった筈なのに、一瞬で目の前まで近づいたのだ。

サトは不意を突かれたようで、抵抗などまるでなく　　・・言葉

通り？吹っ飛んだ？。

「ぐ・・あッ・・」

サトの呻き声を聞くと、『ドガッ』と言う嫌な音が聞こえた。

見なくても予想できる、今の音はサトが壁に叩きつけられた音だ。

俺は息を呑むと、動かない足を無理矢理動かして後退した。

《能力者一匹、片付けたあーっと》

無邪気に喜ぶ影の声は、まるで普通の子供のようだ。

だが、その姿と現状は、そんな可愛いモノじゃない。そうだったら

どんなによかったか。

「ゲホツ・・ガツ・・ハ・・」

サトは壁に寄りかかり、長い間むせていた。

眼鏡が床に落ち、ボロボロに碎けている。

肺にあつた空気が絞り出されてしまったようだ。

サトの頭からは血が流れ、頬から顎へと伝わって服を湿らす。

「サト!!!」

「そこにいて・・!」

近寄ろうとした俺を制止するように、サトは声を絞り出した。

「そこ・・は、結界が張ってあるんだ・・非常用の結界・・影は  
入れ、ない・・」

足元を見ると、そこには円陣が描かれていた。

円陣を描く線が微かに光り、俺はその円陣の中に入っていたのだ。

しかし、一人分が入れるスペースしかない。だからサトは自分を犠牲にしたのだ。

《誰と喋ってるのかな?》

<sup>ロスト</sup>影が首を傾げる。

「!?!?」

・・俺が、見えてない?

もしかして、サトは結界に俺を入れただけでなく、幻で俺の姿を消しているのか?

サトはニツと笑うと「独り言」と影に言った。<sup>ロスト</sup>

《あっそ》

<sup>ロスト</sup>影はサトに近付き、寄りかかるサトの頭を足で踏んだ。

頭が壁に押し付けられている。

サトは苦しそうに呻き、影は狂ったように笑っていた。<sup>ロスト</sup>

サトの口からは血が流れ出し、抵抗するサトの力も段々と弱まって

いった。

圧倒的な差に、助けに行こうとしていた意思を削ぎ落とされる。弱い自分に苛立ちながらも、体は言うことを聞かない。

でも、このままではサトが . . .

サトが？

. . . 死 . . . ?

「何を . . . 浮かれて . . .」  
無意識に口が動く。

「嬉しかったか？ 同類フロウに会えたことが、そんなに  
無意識に。」

「危険なところに足を突っ込んだのに、か？」  
口が。

「死ぬかもしれないのに、か？」  
動く。

「滑稽だな」  
俺は自嘲気味に笑った。

途端、視界が薄れていった。

\*\*\*\*\*

《そろそろ、終わりかなあ？》

くすりと影ロストが笑う。

サトは頭を踏みつぶされながら、レイを思った。

・・・そろそろ、能力デルターを使うのも限界が・・・

時間稼ぎにはなつたかな？

そろそろ応援が来るかな？

サトは思考が朦朧になりながら、レイが助かることを望んだ。

そしてサトは自らの能力デルターを解く

・・・否、正確には？解けた？。そして、抵抗していた体の力を抜いた。

《あれ、弱っちいの》

影はつまらなそうに口を尖らせ、くるりと踵を返した。

《あ、もう一匹見つけ》

影ロストの視線の先には　・・円陣の中で座り込むレイの姿だった。

サトの『幻』が解けたため、姿が露わになったのだ。

顔を俯かせ、微かに震えている。表情は見えないが、泣いているのだろうか。

《結界か、忌々しいなあ》

影ロストはそのまま、レイに歩み寄った。レイは相変わらず俯いたままだ。

サトはしまった、と思いながらも、体を動かすことができずにドサリと倒れ込んだ。

《遊んでよ》

影ロストの子供らしい声に、レイはピクリと肩を揺らす。

影ロストは反応したことに喜び、《あは》と楽しそうに声を上げた。

レイはそれを聞き、ゆっくりと　・・・

顔を上げた。

表情から感じられるのは、レイが抱いている筈の恐怖が感じられな  
い  
・・・完全な怒り。

## ウラの世界

サトは薄れる視界をなんとか保ちながら、結界の円陣の上に座り込むレイを見つめた。

「なんだ、これ」

声にならない声を口から絞り出すと、体中の痛みがサトを突き刺す。痛みを耐えながら、レイの気配を探った。

・ ・ ・ なんて、レイから影の気配が・ ・ ・ ?

レイが目の前にいるAランクの上級影を睨んでいる。

多分、サトがロボロボに倒されてしまったから。

だが、そのレイから、今までに感じたことのない膨大な影の力が溢れている。

それこそ、Aランク以上の。

目の前で笑う影は、それに気付いていない。

もともと影に気配を読み取る機能はないから。

だが、能力者は違う。影や能力の気配を間違えないように、訓練して戦場に立つのだ。

《ねえ、遊んで?》

可愛らしい無垢な子供の声で、影はレイの目線に揃えるようにしゃがむと言った。

レイは反応せず、ただ黙って影を睨みつける。

その動作でさえ嬉しそうに、影ははしゃぐ。

《それじゃ、結界を壊しちゃおっかな?》

影は待ち切れずに立ち上がると、一步後退した。攻撃を繰り出す間合いをとるためだ。

このままではレイが危ない。  
サトはそう感じ、動こうとする。だが、痛みがそれを邪魔する。

ふいに声が聞こえた。

「よくも」

レイから発せられる言葉だった。

「よくもサトを」

《はあ？何々、怒ってるんだ？》

レイの雰囲気徐徐に変わる中、影は尚も馬鹿にしたように嘲笑う。  
ロスト

「怒ってる？そうだね、怒ってる」

レイは声をかみ殺して笑うと、ニイツと頬を釣り上げた。

「だから、消してやるよ」

ザワリ、ザワリ

雰囲気が変わった。

ここは建物の中だと言つのに、生温かい風がサトの頬を撫でる。

風はレイを中心に流れているようだった。気配もレイを中心に渦巻き始めている。

レイの不気味な笑顔は、さっきまでのレイじゃない。

ザワリザワリ、ザワリ、ザワリザワリザワリ

・・・

嫌な感じだ。

直感と言つてはそれまでだが、これらはレイの意味ではないのだと思つ。

《何？この感じ、お前・・・なにも・・・》

『』の『』という言葉と同時だろう。

レイは影<sup>ロスト</sup>を掴みあげていた。  
もちろん、素手では大したダメージは与えられない。人間とは違う。  
だが、それでも影<sup>ロスト</sup>は予想以上に動揺していた。

《離せ、離せ！！》

影<sup>ロスト</sup>はレイの腕を千切ろうと、そこらじゅうから溢れ出る『闇』で腕を包みこんでいたが、何があつたのかそのままジタバタと暴れるだけだつた。

レイの瞳が黒から鮮明な紅に染まる。真っ赤なその色は、まるで人間の血の色だつた。

「愚かな」

影<sup>ロスト</sup>が暴れる中、尚も平然に片手で持ち上げるレイは、小さく呟いた。

「弱小の分際で、我<sup>ロクシ</sup>の器に手を出すなど・・・」

そして怪しく笑つた。

「身の程を知れ」

そのまま影<sup>ロスト</sup>を掴んでいた手を、ギョツと握り潰す。

途端に影<sup>ロスト</sup>は煙と化した。

シウウウと空中に漂い《くそう、人間に負けるなんて》と吐き捨てて消え去つた。

「人間？」

レイは何も無くなつた空間を見つめ、言う。

「我<sup>ワタシ</sup>の名は羅刹、あんな弱小の生き物と一緒にするな」

「ら、せ・・・っ」

サトは声を振り絞る。

まだ体中痛い、先ほどよりは楽になつたようだ。

『羅刹』と名乗るレイは、サトに視線を向ける。

レイはサトが知っている限り、目つきがまるで違う別人だつた。

サトは身をよじらせ、体を起こす。

「また会ったな、小僧」

ハクがレイに会いに行った時も、オーナーが部屋に入る際に？羅刹？と呼んでいた。

オーナーは？羅刹？の正体を知っているのだ。

そして、恐らくこれも先ほどと同じなのだろう。

「おまえ・・・は、なに・・・も・・・の」

「それを知るにはまだ早いな」

レイは即座にそう切り返すと、静かに崩れ落ちた。

「サト!!」

オーナーの声が聞こえた。

だが、サトの体にも余裕は出ず、そのまま意識を失った。

\*\*\*\*\*

「・・・ん・・・」

サトの声が聞こえ、俺はすぐさまカーテンを勢いよく開ける。

「あれ、レイ・・・ッて」

サトは俺の顔を見て起き上ろうとし、まだ体が痛むのかベッドに再び倒れ込んだ。

「ここは？」

サトの視界に入ったのは白。

カーテンの白、シーツの白、視界に入るモノは何もかもが白だった。

「本部の病院・・・だって、オーナーが言ってた」

「そっか」

病院と聞いて納得する。

すつつと息を吸うと、病院独特の薬品のニオイがした。

本部の病院は、一人前の能力者<sup>フロウ</sup>が揃っている。

ここで多いのが『治癒』の能力<sup>デルタイ</sup>を持つ人たちだ。

だが、この人間は戦闘能力にも長けているため、安全なのだ。

「よかった・・・！！死んじゃったのかと思った・・・」

俺は心底安心し、はああ・・・と深く息を吐きだした。

「ごめん、役に立たなくて・・・ごめん、ごめん・・・」

俺は歯を食いしばると、サトが殺されかかっている映像を脳裏に浮かべる。

動け、動け。

そう念じるのに、まるで動こうとしない俺の足。

怖いのか？恐ろしいのか？

何の覚悟もないくせに、平穩な日常ではない『特別』な立ち位置に立てたことを喜んだ。

その結果がこれだ。

怖くて怖くて、行動に移せずにいた。

目の前でサトが死にそうなのを目にして、尚自分だけ助かるうとしていた。

安全な結界の中で、サトが影<sup>ロスト</sup>を倒してくれるだろうと割り切って、

サトに助けってもらっていた。

「じめんッ・・・」

唇を噛むと、口に鉄の味が広がった。

自分でも気付かない内に、強く噛んでいたのだろう。

それでも自分の悔しさは消えない。

俺は強く強く拳を握った。

サトはそれを見て、ニコリと笑って俺の頭を撫でた。

「最初は誰だって怖い、動けない。だから、強くなるうと必死になつたんだ」

「ッ……」

「俺も同じように、オーナーに助けられて生きてる」

目頭が熱い。

気を許したら、雫がすぐにでも零れ落ちそうなくらい。

歯を食いしばる表情も、震えてる。

「だから、責めないで」

同じ年とは思えない。どうしてサトはこんなにも強いのだろうか。

何度も死にかけたから？命がけだから？

命を失くしかけたことがない俺は、サトがわからない。だけど、これからは違う。

もし、もしも　　・　　これから先、護りたいモノを護る時は、全力で。

「　　……ありがとう……」

闘えるかな。

「俺、オーナーたち呼んでくるッ」

涙を見せたくなくて、俺は逃げるように病室を飛び出した。

「　　……レイ」

サトはレイがいなくなり、誰もいない病室で一人呟く。

「君は何者？」

・・・それがな、一瞬だが・・・大きな影の気配がしたんだ。

カナが言っていた。

カナがレイに出会い、サトがカナに状況を聞いていたとき。ハクにレイの場所に向かわせたそのあと、カナが不安そうにサトに言ったのだ。

\*\*\*\*\*

「影の気配？」

「そう、ただし一瞬だ。一瞬で、消えちゃった」

カナは考え込むように唸った。

「ただなあ、素材としては結構すげえし、おまけに影も見える、と。そんな奴、殺しちゃうのも、放っておくのも惜しいだろ？」

\*\*\*\*\*

確か、そう言っていた。

そして、サト自身も感じた。大きく、圧倒的な影の気配。

そして現に、Aランクの影を言葉通り一捻りで潰してしまった。多分、レイによる行動ではない。

些細なことで涙を流す彼が、あんなに残酷な笑みを零せるわけがない。そう思っている。

あ の とき . . . ロスト 影を捉えたときに見えたあの笑顔は、正直背筋が凍った。

「君は . . . .」  
独りずに呟いた。

疑問は消えない。

そして、少年を中心にウラは姿を変え、少年もまた、ウラによって運命が変わっていた。  
くるりくるりと運命は変わり、少年はそれらに翻弄されながら生きる。

それはまた次の話になるのだが。

## ウラの世界（後書き）

こんにちは、れんです。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

『なんとか山のなんとか様』同様、『繋ぐモノ』もまた文章力がな  
い私には難しいです。

能力の表現とか、難しすぎます。

…と、ちょっとした弱音はさておき。

言葉の整理をします。

リノド・ライ  
百鬼衆

ウラの世界の、大きな組織。

デルター  
能力

人間が普段持ちえることのない力。

フロウ  
能力者

デルターを操ることができる人間。

リッセン  
素材

デルターを操ることができない人間。

ゲート  
門

空間と空間を繋ぐ出入口。

ロスト  
影

一見『闇』に見える、真っ黒な煙のようなモノ。

サトは人の形をしたロストを？Aランク？と言っている。

次回からは、上記の言葉を一回目以降、（ ）内の言葉だけで表します。

何かと面倒くさいので（笑）

さて、何故かまた謎っぽいのが出てきたぞ（笑）  
どうしてこう、私が書く文章は…！！  
人物もごっちゃりしてきたので、整理。

レイ（樋田 玲哉）

主人公。ロストが見える以外は、多分普通の男子高校生。

オーナー

年齢不詳、多分20代。

金髪で、可愛いボンボンがついた白いニット帽を被る青年。

普段は滅多に怒ることがない、温和な人。

デルター不明。

カナ

レイより歳がちょっと上の少年。

背が高く、特徴的な（左側の髪の毛を後ろにやり、ピンで止めるという）髪型で、栗色の髪をしている。

『炎』のデルターを持つ。

サト

レイ・カナ・サト・ミツ・ハク・オコ  
十三班で一番の常識人。

レイと同じ年で、眼鏡と黒髪が特徴。

『幻』のデルターを持つ。

ハク

誰にでも敬語を使う、ひねくれ者。

茶髪の髪が特徴で、リノド・ライでは？天才？と呼ばれる。

『念』のデルターを持つ。

オコ

チーム内で一番若い少女で、前髪をピンで止めている。

明るい性格で、チームメイトとオーナーに懐く。

フロウでも珍しい、二つのデルターを持つ。

『身体強化』と『読心術』のデルターの持ち主。

ミツ

肩まである真っすぐの髪が特徴。

細い体つきに、眉目秀麗と言え顔は俗に言う美少女。

デルターはまだ明かされていない。

優樹

レイの親友。超お人よしで、好奇心旺盛。

トキ

？天才？と呼ばれたフロウ。

行方不明で、何もかもが謎。

…ツと、こんな感じですかね？

オーナーは謎が多いです。

いい年こいて、ニット帽なんか被っちゃってます。

夏でも冬でもお構いなしです。

優樹もこれからいっぱい出していきます。

トキは…多分出ると思います。

これからちょっとずつ謎を明かしていきます。

それでは、これからも『繋ぐモノ』を、よろしく願います!!

## 歯車がクルウ

そして、昨日の翌日　　・　　つまり今日に至るわけで。

俺はとりあえず、オモテの学校の寮部屋へと戻ってきていた。

サトの傷も、『治癒』の能力デルターによって大分よくなり、オーナーに一旦帰るように言われたのだ。

当然俺は門ゲイトとなる、あの埃まみれの体育館倉庫から出ることとなる。人がいないことを確認して急いで出るといふ動作は、神経を尖らせるために無駄に疲れる。

もし万が一、倉庫から出るところを誰かに見られてしまえば　　・

・俺の余計奇妙な噂がたちまち一人歩きし、俺が居たたまれない空気に襲われるのは目に見えている。

それだけはさすがに避けたい。

寮部屋に戻ると　　さすがウラの力、部屋は荒らされる前に完璧に戻っていた。

俺は勢いよくベッドに飛び込むと、息を大きく吐いた。

「夢みたいだな」

嬉しい意味ではない。

ただ夢のように、信じ難いことが連続して起こったためだ。

昨日から今日にかけて、たくさんのがありすぎたからか、俺の頭は限界を超えている。

俺は仰向けになり、手を天井に向けて伸ばす。

見えるのは手の甲と、その背景に見える天井だけだ。

聞こえるのは、時計の針が動く音と、心臓の音。

静かだ。

こつも静かだと、昨日の夢のような記憶がドツと流れ込んでくる。  
そして、ふと思った。

「そついえば、影はどつなつたんだつけ？」

百鬼衆の本部に襲撃したロスト、サトが身を呈して俺を庇つてくれたことは覚えてる。

悔しくて、悔しくて。

何もできない自分かもどかしくて、それでも進もうとしない自分が腹立たしくて。

カツと頭に血が上り、欠片ほどしかなかつた冷静さが粉碎した。

そして、それからの記憶がない。

気付けば俺は、サトが寝ていたベッドの隣のベッドに寝かされていて、目を覚ますとオーナーが俺の顔を覗いていたのだ。

何も聞かされてない。

何があつたのか？どうして俺はここに居るのか？

聞いてはいけない気がしたのだ。

オーナーは俺の心情を察したのか、そうでないのか、避けるようにフワリと笑つて去つていつた。

コンコン

静かだつたその部屋に、ノックの音が聞こえた。

そして「れえーいやくんツ」と、やけにテンションが高い、親友の優樹の音が扉の向こうで響いた。

「入つていい？」

その言葉と同時に堂々と扉を開ける優樹に、俺は無意識にため息を漏らした。

「なんだよ、そのため息」

「なんで、返事する前に部屋に入るんだよ」

「？なんで？つて・・・いつものことじゃん」

自信満々に親指を立てる優樹。

「お前今、不法侵入の常習犯だつて自分から言つたぞ？」

「気のせい気のせい」

優樹はそう言つと、ちょうど近くにあつた椅子に勢いよく座つた。

「学校、来ないの？」

「ああ、行つても気味悪がられるだけだからな」

それは俺の生まれつきの体質からだつた。

それを気にしてか、優樹はちよくちよくこつやつて俺の顔を見に来る。

心配しているというのを隠して『暇だから』『遊ぼう』と言つ。

「そんなことないよ、俺はレイに来てほしい」

「お前はおかしいんだつて。明らかに俺みたいなの？異質？がいると、怖いだろ」

「怖くないつて」

「優樹、俺のことは気にしなくていいよ」

「ッ……」

「どうせ、俺が学校に行けば俺にベツタリするんだろ？」

俺は確信していた。

優樹は必ず、俺の後を追つてくる。

それは長年の付き合いからの予測であり、確定である。

優樹は超がつく程のお人好しだから、俺みたいになりから蔑まれて  
いる人間を見れば、何が何でもついてくるんだ。俺が独りにならな  
いように。

でもそうすれば優樹も嫌われるだろう。

俺とつるんでいるから、と言つ理由で嫌われるのなら、一緒にいて  
ほしくない。

これが俺の願いだ。

「でもツ・・・」  
尚も食い下がるうとする優樹の頭に手を乗せ、ぐしゃぐしゃと髪を乱す。「うわツ」と声を上げて阻止しようと抵抗する優樹を見て、俺はニツと笑った。

「聞き分けねえ奴は嫌いだ、ユキ」

「う」

『ユキ』という呼び名は、奔放で素直な優樹が唯一好きになれない、優樹の兄が使うのだ。

好きになれないと言っても、嫌いなわけではない。ただ？苦手？なのだ。

まず見透かした瞳が好きになれないんだそうだ。

何もかもを理解しているような余裕のある笑みを浮かべる、兄の瞳が。

そして優樹が悪戯をしてしまったとき、ジワリジワリと追い詰めるように責める兄が怖いらしい。

俺も会ったことはあるが、正直苦手である。

そんな優樹の兄の口調を真似してみたのだ。

「ユキ？余計なことに無駄に干渉するな、僕はうるさい奴が大嫌いだからね」

口真似をしながら、笑いながらこの言葉を並べる優樹の兄の顔を浮かべた。

優樹の兄は、自分を邪魔したり、自分の害を為したりする人間には容赦しない。

そして他人に手を貸す程、甘い性格でも、優しい性格でもない。だがそれと同時に笑顔を決やさない。

笑顔と言っても、オーナーやミツのような相手を安心させるような優しい笑顔ではなく、それこそ精神的に恐怖を与えてしまうような冷たく恐ろしい笑顔だ。

優樹とは性格が真逆だ。

優樹は俺の言葉を聞き、兄のことを思い出したのだろう。顔が青ざめ、何も言わなくなった。

こちらとしては都合がいいが、少しやり過ぎかと思うほどの効果だった。

優樹は立ち上がると、乾いた笑いを零しながら遠ざかる。

「そ、そそそ、そろそろ行くわ。そんじゃ、時々でいいから来いよ？」

余程動揺していたのだろう。声が震えていた。

優樹はそれだけを言い残すと、足早に部屋を出ていった。

また、静けさが戻る。

しんとした部屋を見渡し、ため息をついた。先ほどまでずっとひとりだったのに、と思う。

優樹が部屋に入って来て騒ぎたてた。そのせいか、この静けさが今更怖くなる。

ひとりだと、自分が自分でいれないようで。

どうにもならない孤独を感じながら、俺は手元にあった布団を勢いよく被った。

\*\*\*\*\*

「話ってなんだよ」

カナが問う。

目の前にはオーナー、そしてオーナーを取り囲むようにカナを含めた十三班のチームメンバーが並ぶ。

レイは十三班に入ったが、メンバーには含まれていない。

オーナーは変わらずボンボンがついた白いニット帽を被っていた。

「レイのことなんだけどね」

オーナーは懐から煙草を取り出し、啜えて火を付けた。

「レイは、何者？」

唐突な質問は、サトが発したモノだった。

目の前でハッキリ見たからこそ感じる、簡単な質問。

Aランクのロストが、結界が張られて安全な本部に発生したことよりも、ずっとずっと大きな疑問。ずっと気になっていた疑問だ。

それは、カナやハクも抱いていた疑問。

オーナーはその疑問に対して驚くことはなかった。

寧ろ、当たり前のような顔を浮かべる。

「それは今から話すよ。チームメイトだから、知っておいてもらわないといけない」

オーナーは口に啜えていた煙草を手に取り、ふうつと煙を吹いた。真っ直ぐ煙が伸びると、ふよりとうねって消えた。

「彼の中には、ある膨大な力を持ったロストが潜んでいる」

「ロスト？」

ハクが訊く。オーナーはその言葉に頷き、さらに話を進めた。

「そう、そしてそのロストは名を羅刹（らっしやく）と言う」

「羅刹、か」

サトは、ロストが襲撃したときのことを思い出した。

レイがいきなり強くなり、ロストを言葉通り『一捻り』で消してしまったのは、その羅刹というロストが原因なのだろう。

「羅刹はね、俺がキミたちぐらいのときに現れたロストなんだ」

「オーナーが？ 私たちぐらいのときってことは・・・私たちと同じように任務をこなしていたってことですか？」

「うん。まあ、俺は物心がついた頃からリノド・ライに入ってたよ」

「そんな頃から・・・」

ミツは目を伏せた。  
ミツを含め、任務を受けている人間にはわかる。  
若い頃からの任務は、相当？きつい？のだ。身体というのもあるが、  
何よりも精神がだ。

任務は危険だ。

何度も死に際を経験する程に。  
人間にとって死にかけるなんて、辛くないはずがない。  
そして物心がつく前から、と言うことは　　・・任務を強いられ  
ていたということだ。

隣にいた誰かが、いつ死んでしまってもおかしくない世界だ。  
そして、ロストは人間の感情から成る。

悲しみ、恨み、憎しみ、妬み　　・・そういった人間の強い？想  
い？が、感情に形を与える。

そしてそれがロストとなって、人間の命をも脅かしてしまうのだ。

自らが創ったモノに侵されるなど、なんとも滑稽な話だ。  
そしてロストは進化していった。人間も進化していった。  
やがてデルターは生まれ、人間はロストを消去する術すべを手に入れた  
のだった。

その後、人間は集った。

ロストを消去することを目的とし、そのためにある会社を創った

・・それがリノド・ライ。

「俺にはさ・・二人、大事な親友が？いた？んだ」  
「いた？」

「今はいない。羅刹の力を弱めて、死んだ」  
「死・・・」

ハクは繰り返すように呟いた。

命なんていらぬ。

常日頃思っていた言葉だ。これは今でも揺らぐことはなく、続いている。

だが、オーナーの表情を見て一瞬揺らいだ。

オーナーは表情を隠しきれずに、辛そうに小さく顔を歪めたからだ。その顔を見て、死を願う自分が、罪悪感に塗<sup>まみ</sup>れていることに気付いたのだ。

「完全に消滅したと思つてた。暫く羅刹の気配を感じなかつたから。だけど、違つたんだ」

オーナーは眉を潜めてため息をついた。

「ここからは俺の単なる推測だけど、確實だとも思つていい

・羅刹は消滅を逃れるために、自分の膨大な力が入り切る『器』を探した。そして、見つけた」

「それが、レイ」

予測するようにサトが呟いた。

「そう言うことだよ」

オーナーはサトの言葉に頷いた。

「羅刹は膨大な力を持つている。『器』が小さければ、『器』が壊れてしまう。壊れてしまえば、羅刹は消滅してしまう。そこに丁度いい『器』が見つかった、それがレイ。羅刹は力を回復しつつある。現に、キミたちに存在を現した。羅刹の力が完全に回復してしまえば、何が起こるかは予測不可能」

オーナーはそこまで言うと、手に持っていた煙草を口に啜え、ふうつと煙を吐いた。

「かと言つて、予測不可能な事態を防げつて言つても無理だよな」  
そして再び煙草を手を取つた。

「ここからが本題 . . . 今言つた事態から、リノド・ライ本

部のお偉いさんから羅刹を発見したキミら十三班に、任務が言い渡された」

刻々と時間が刻まれる中。

カチリ、カチリ

少しずつ、確実に、歯車が狂っていった

・  
・  
・

## 自分をシル

学校へ足を向けたのは、気まぐれだった。

別に優樹が部屋に来て説得をしたからではなく、行っても得になることがあるわけでもなく、本当にただの気まぐれだったのだ。

優樹は毎日のように俺の部屋を訪れる。だからその気まぐれが、優樹による行動だとは考えにくい。

原因が最近日常が変わったことだとすれば考えられなくもないが、結局は原因を納得するのも無理矢理に過ぎない。

ただ一つ、本当の原因を言うならば　　・・独りが怖くなった、だ。

本部にロストが発生した事件、気付いたら俺はベッドの上にいた。オーナーは何も告げない、あれから十三班のメンバーにも会ってない。

何が起こった？

自分がそれを覚えてない以上、それを知るのは不可能だった。

記憶を失くした、と言うわけではなさそうだ。

記憶が途切れている直前に、俺は視界が霞んでいくのを覚えていた。そこから単純に考えるのなら『意識を失くした』だけだろう。

だが、俺の直感は違うと言っていた。

俺は俺を失くしていたのだと。俺は俺でいられなくなったのだと。

そう告げる。

怖くなった。

またそんなことが起こったら、今度は自分に戻れなくなるんじゃないかと思っただから。

独りでいれば、ごちゃごちゃとそんなことを延々に考えてしまう。  
だから行つた。

たとえ蔑まれようが、妙な噂をされようが、独りになるよりはマシ  
だと考えたのだ。

・・・だが、この状況はなんなのだろうか。

「矢倉美鶴やぐらみじゅくです、よろしくお願いします」

クラスメイトが俺を見て、ひそひそと何かを言っているのを感じな  
がら、ぼうつと席に着いていた俺が見たのは・・・真正銘の  
ミツだった。

「は？」

俺は眉を潜めながら優雅に歩くミツを見てみると、一瞬ミツが俺に  
目を向けた。

俺はいきなりすることに驚き、咄嗟に視線を外と、ミツはそれを見て  
小さく笑つた。

「可愛い子だあ」「モデルさんみたいだね」「友達になれるかなあ」  
ミツを見て口々に言うクラスメイトの言葉を聞き、内心驚いた。

確かにミツは顔立ちも綺麗で、モデルのように体つきが細い。  
だがここまでクラスの第一印象がいいと驚いてしまう。

俺がミツと知り合いだとなれば、クラスメイトはどんな反応をす  
るだろうか。

俺に影響が及ばなきゃいいけどな、とささやかな願いを浮かべつつ、  
ミツが席に着いたのを確認して、机に突っ伏し寝る態勢に移った。

・・・

「レイ、起きて」

ミツの声が聞こえ、ゆさゆさと体が揺すられた。

俺は突っ伏した顔を上げると、腕に感覚がなかった。頭の重みで血が通わなくなり、手が痺れていたのだ。やがて血が通い、手に感覚が戻る。

「あ、ミツ」

何が起こってるんだっけ？て言うか、ここはどこだ？

そこまで考えて、自分が珍しく学校に来て、ミツが転校したことを知ったということ思い出した。

ついでに言えばここは教室で、謎の美少女と親しげに話す、『異質』で気味の悪いクラスメイト（俺）の奇妙な図が完成したところだ。

見事なまでに、クラスメイトの視線が俺たちに集中する。

なんだ、この状況。

「目立つなあ、オイ。こつち来ないで、頼むから」

俺はなるべく素っ気なく言い、もう一度寝る態勢をとる。

どよっと周りがざわめき「転校生に酷いこと言ったぞ」「あいつ何様だよ」と男女共に（あえて言うなら主に男子）が騒ぐ。

目立ちたくなかった、今日は厄日だと唸る。なんで今日に限ってミツが転校してくるのだろうか。優樹に顔を見せてさっさと帰ろうと思ってたのに。

「今日は引き籠りじゃないんだね」

「俺がいつ引き籠りだって言った」

「だって、学校来てないんでしょ？完全な引き籠りじゃん」

ミツは俺が座っていた席の隣に座って、悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

ウラの人間でもこう見るとやっぱり普通の女の子なんだな、と思いつながら「違うし」と否定した。

引き籠りだなんて言いがかりだ、俺は歴れっきとしたサボりだぞ。いや、サボりでもないか。ちゃんと欠席だとは連絡しているからな。と、

少しハズれた自問自答をする。

「って言うかさ、何で皆にミツが見えるんだ？前カナと会ったときは、『何で見えんの？』って訊かれたから、ウラの人間はロストみたに見えないんだと思っただけだ」

「ああ、それならね」

ミツは俺の言葉に反応して制服のポケットを探ると、何やら青い結晶のようなモノが出した。

否、結晶だった。

深みがかかった青い結晶が、ミツの手の上で鈍く輝いている。

「これで存在を変換できるの」

「変換？」

俺は首を傾げた。

「えつとね、たとえばレイみたいなオモテの人間なら持っている？形？を『光』とすると、ロストや前に見たカナの？形？　つまり、存在を『影』とすると。オモテの人間が見えるのは、同じ『光』の存在の姿だけ。つまり、一般人が見える全ての存在ってこと。だから普通の人には『影』は見えないの。だけど、私たちウラの人間は違う」

「・・・」

正直わからない。

しつこいようだけど、俺は頭が悪いのだ。理解できるだけの脳みそが備わっていない。

「わたしは訓練をして見えるようになったんだけど、レイは生まれつきだって言ったよね。ウラの人間とは『影』の存在を知り、見ることが出来る人のことを言う」

「うーん」

「『光』の人間でも、訓練すれば『影』の存在を見ることはできる

んだけどね。ただ、認識していないと見えない。信じてない人が、信じてないモノを見ようとしてもしないように、信じてる人にしか見えないの」

「よくわからんな」

ミツは俺の言葉に苦笑する。そしてフォローなのか「知っても知らなくてもどつちでもいいから、大丈夫だよ」と言った。余計傷ついた気がする。

「私が私である今の？存在？は『光』だけど、リノド・ライには『光』を『影』に変えることができるフロウがいるの。そしてこの結晶は、今言った『変換』のデルターが結晶化したモノなんだ。これを握って、幽体離脱のイメージを頭に浮かべれば変換できるよ」

「幽体離脱って・・・」

要するに、どう言うことなのだろうか。

理屈はわからないが、『変換』のデルターを持つフロウがいることはわかった。そして今ミツはそのフロウの結晶を利用していること。「まあ、結構大事なんだよ？ロストと闘うときは、オモテの人間に見られたらまずいし。だからリノド・ライでは『戦闘時は必ず変換すること』を決まりとしてるくらいだから」

「え、マジで？俺出来なきゃ戦えないじゃん！！」

「でもまだレイはフロウじゃないから、関係ないけどね」

「なんか酷いッ」

「そう？」

ミツはニコリと笑って首を傾げる。

「ついでに言うとな、ハクとサトもこの学校に転校してるよ。オーナーも教師として転任してるし・・・これでレイと一緒にだね」

「はッ？マジでッ！？」

驚いて声を荒げてしまった。

ひそひそと俺たちを見て変な目で見ていた周りは、俺の声に驚いて視線を向けた。

おかげで俺とミツは余計視線の的だった。

俺は居たたまれない気持ちになり、うっと息を呑んで縮まる。

「そんなに縮まらなくていいじゃん、堂々としてなよ」

「うるせえよ、人の勝手だろ」

ミツは何もわかってない。

長年何かを言われ続けて、周りに蔑まれ続けて、どうして堂々としていられるのか。

ウラの人間として、存在を認められたミツとは違う。

じいっと見つめられ、何となく居心地が悪くなって視線を逸らす。

するとミツが、俺の気持ちを見透かしたように「私がいるのに」と口を尖らせた。

「私だけじゃなくて、十三班やオーナーがいるじゃん。それなのにウジウジウジウジウジウジウジウジウジウジウジウジしちゃって、もっと堂々としてなさいよ」

「いや、ウジウジ言い過ぎだから」

ミツは大人のように落ち着いた印象では考えられないような、よくわからないボケを堂々と口に出す。

そんな状況に少し緊張感が解れた。

「俺はオモテでも認められないんだ」

・・・認められない？

いや、違うな。

俺は自分の考えに、首を横に振って考え直す。

認められたんだ。ウラの存在を知って、デルターがあることを知って、秘密の会社があることを知って。ウラの人間になることで認められた。

「でも、そうだな」  
すうつと息を吸ってみる。  
簡単に、あっさりと、目の前の世界が広く感じた。  
周りのクラスメイトも、あれ程嫌だったオモテの世界も、箱のよう  
に感じたこの教室も、全てが明るく広く感じたのだ。  
「なんか、楽になった」  
気の持ちようで、こんなにも世界は変わるのか。

「ありがとう」

「どういたしまし・・・」

「玲哉あー!!」

ミツの言葉を遮るように、俺を呼ぶ声が聞こえた。

聞き覚えがあり過ぎる声だ。それに俺を『玲哉』と呼ぶ人物は一人  
しかない。

「優樹か」

「誰？」

「俺の幼馴染」

ミツの言葉に、簡潔に答えた。ミツは「ああ、なるほど」と言つと  
声のする方向を見た。

優樹は全力疾走で教室に入り込み、俺の姿を探す。そして目が合う  
と同時に飛びついた。

「玲哉あ、やっと来てくれたんだあ。これで脱、引き籠りだね」

「オイこら、誰が引き籠りだ」

そしてこのくだり、聞き覚えがあるんだが。

「聞いて聞いて！今日ね、時期外れの転校生が三人も来るんだって  
！！同時って本当に珍しいよねツ！一人は一つ下の学年にいて、二  
人はA組とC組にいるんだよ。しかも新しい教師まで来てさ、大人  
で男なのにボンボンつけた白い帽子被ってんの。担当は社会らしい  
んだけど、結構やる気なさげな人だよ！！・・・って、あれ。」

見慣れない子がいるけど、誰？」

「ここに組だぞ？お前が言った転校生だよ」

俺は優樹のマシガントークを聞き流しながら、ため息をついた。よくもまあ、あんなに長い台詞を嘔まずに息継ぎなしで喋れるものだ。

「マジ！？超可愛いじゃん！！」

「どうも」

ミツは微笑むと、「よろしく」と言った。

「よろしく。俺、優樹って言うんだ。呼び捨てでいいよ」

「私は美鶴。呼び慣れてるから、ミツって呼んで」

「了解」

優樹は改めて「よろしく、ミツ」と言っただけでニッと笑った。

「優樹、俺これから学校来るようにするよ」

「マジ？じゃあ毎日ここに遊びに来るね」

「学校行かなくても部屋に乗り込む奴がよく言う」

俺はため息をつく、ミツが隣で笑った。

俺は訝しげな表情を浮かべ「なんだよ」と言うと、「仲良いね」と言った。

そう見えるのか。

ここ数日驚くことしかなかった毎日だったが、それでもいいと思えたのは・・・

何故？

まあ、学校に来るようになっただけでも進歩なのだろう。

俺は俺が少しずつ変わっていることを知った。

## 何かがカワル

『C組の怪奇男が、美少女転校生といきなり仲良くなった』

そんな噂が流れていることを知った。

いくら言われ慣れてるからと言って、気分がよくなるわけがない。

怪奇男ってなんだ。怪しさ満点じゃないか。

それに、いきなり仲良くなったわけじゃなくて、元から知り合いだったんだから噂は全然違うのだ。

これ以上噂が一人歩きするのは嫌だが、昨日で学校に行かないということをやめた。

優樹に余計な心配をかけさせてしまうのも悪いし、何よりミツたちがいる。

「にしても、あの噂は酷過ぎる」

「まあ、しょうがないって。引き籠りだったんだもん」

「何度も言うけどな、引き籠りじゃねえ!!」

今俺とミツはハクの教室に向かっている。

昼と一緒に食べようと、ミツが提案したのだ。

初対面からツンケンしていたハクとは仲が良くなる気はしないが、とりあえずチームメイトには変わりない。大人しくミツに従うことにした。

悶々と考えている内に、ハクのいる一年B組の教室に着いた。

「ハクちゃ ん」

俺は出入り口から顔を出して、怒りを煽るような呼び方をした。

すると案の定ハクは鬼のような形相でこっちを睨み、小さく舌打ちをして近づく。

その形相に少しだけ怯む。

これ、殴られるんじゃないかなと思った。

ハクと同じ教室にいた一年も、こちらに視線を向ける。いきなり二年が一年を呼ぶものだから、珍しいのだろう。更に呼びだされたのは転校生で、呼びだしたのは学校に来ない問題児と、二年の転校生だ。注目の的になるのは目に見えている。

「おはようございます、ミツ。」

あと、あなた誰ですか」

「殴るより酷い!？」

殴りはしなかったものの、真面目な顔で俺を忘れやがった。冗談だとわかっていても凹む。

「紹介するよ、この人は同じクラスのレイ」

「ミツまでツ!？」

「軽い冗談だよ」

ミツは声を上げて笑うが、ハクは一瞬も笑わない。 . . . どころか、俺と目を合わせようとしめない。

何故ハクは俺がこんなに嫌いなんだろうか。

「何しに来たんですか？」

ハクはため息をついた。

「いや？ハクも学校久しぶりだし、ちょっとテンション上がったな  
いかなって。私ちょっとドキドキしてる、高校生活って憧れてたんだよねえ」

「別に、僕はそこまでじゃありません」

「久しぶり？俺みたいに学校通ってたワケじゃないのか？ウラの世界に足突っ込んで、生活は変えられずにいれるんだろ？」

「そうなんだけど、私の場合はオーナーに拾われた身だったから。」

任務に集中するために、学校には入らなかったの。ハクはオモテの

人間が嫌いで、進んで学校やめてリノド・ライに入社したんだだけ  
ね」

ああ、だからか。

俺は心の中で納得した。ハクが俺を嫌いな理由、簡単なことだった。  
俺みたいなの『使えないオモテの人間のようなウラの人間』が嫌いな  
のだ。

能力も使えずに、自分と同じ十三班に居座っている新入社員がいる。  
それを好きになれと言われても、ハクの性格なら無理かもしれない

・・否、現に無理なのだ。

ハクとの付き合いもまだ短いが、あれだけ素直に表に出されたら、  
嫌でもわかる。

だが、一番流してはいけない内容があった。

「ミツは・・・オーナーに拾われた・・？」

拾われたと言うことは、捨てられたと言うことか？

「うん、拾われたの。私のお父さんとお母さんは、何て言うか・・・  
怪しい宗教みたいなモノにハマっててね。毎日毎日、二人して狂っ  
たように高笑いしながら私を殴った。私を殴ることに飽きたのか、  
私はボロボロになって道端に捨てられた。それでオーナーが通りか  
かって、私は拾われた」

「そ、なのか」

辛い筈なのに、笑いながら過去を話すミツ。

ハクは隣で壁に寄りかかって黙って聞いている。恐らく事情は知っ  
ていたのだろう。

「レイ、そんな辛そうにしないでよ。リノド・ライに入る社員は、  
ほとんどそういうワケありばかりなの。同情してたらキリがないよ  
？」

「ほとんど？じゃあ、カナたちも」

「まあ、私が語っていい過去じゃないし・・・仲良くなれば自分か

ら話してくれるし、ハクだって根からレイを嫌いってわけじゃないでしょ？」

「嫌いですね」

「ほらね」

「何が？ほらね？だ、まるっきり嫌ってるじゃねえか」

俺はミツを軽く小突くと、ハクは俺を鋭く睨んだ。

「はあ、なんでこんな人が十三班に入ったんでしょう。単細胞は力ナだけで充分なのに」

「言ったなお前、覚悟しとけよ」

ハクはあからさまに嫌そうな顔を見ると、「それより」と話を切り出した。

「何しに来たんですか。ミツはまだしも、アナタと慣れ合う気はないんですけど」

いちいち気に障る言い方をするな。

言葉が出かかった口を慌てて塞いだ。

もし俺がそれを口にしたとして、ハクなら一瞬で再び俺を挑発する言葉を返してくるだろう。

ここは俺が大人になって、喧嘩を避けよう。

俺はそう割り切ったため息をついた。疲れる。

「ごめんね、ハク。レイに、私たちが何でこの学校に来たかを説明しようと思つて。ハクなら私より簡潔に、遠慮なしに言ってくれると思つたから」

遠慮なしに？

ミツの言葉の中で違和感を見つけた。

ここに来た理由に、俺の不都合なことが含まれているということだろうか。

それとも死の宣告とか、俺の心身に害を及ぼすことだろうか。

「チツ・・・しょうがないですね」  
疑問に思って首を傾げるが、二人が伝えようとしないう限りは俺がわかるはずもない。  
ハクは軽く舌打ちをすると、「場所を変えましょう」と言った。  
そのときの俺は、嫌な予感しかしなかった。

移動した先は屋上。

いつも俺がいた場所だから、馴染み深い場所だ。  
ここでカナに出会った。

出会って・・・運命が変わった。

まだ最近の記憶を脳裏に浮かべて呆けていると、ハクが俺の背中に蹴りを入れた。俺は前のめりになりながらバランスをとり、「何すんだよ」と眉を潜めた。

一方ハクは、俺よりも深く眉に皺を寄せ、「ぼうつとしないうでください」と吐き捨てる。

何で俺のことがこんなに嫌いなんだろうか。

そりゃ、俺はまだデルターが何かさえわかってないけど、そこまで毛嫌いしなくてもいいじゃないか。と、少しだけ不満を零す。もちろんハクには聞こえない声で、だ。

「さて、それじゃ・・・」

「あ、屋上にいたんだ」

ミツの声を遮って走ってくるのはサトだった。

「ああ、今からレイに話そうと思ってたの。よかった、サトも来て」「そっか、間に合ったってことかな？」

サトはそのままストンと屋上のコンクリートに腰を下ろした。  
続いてハク、ミツも座った。

俺は何をするのかと三人を見回すが、そのまま真似をして腰を下ろ

した。

「まず、単刀直入に言いますね」

ハクが口を開いた。

そして、ハクの次の言葉　　・　俺は考え付かなかった。

今思えば、これから起こる騒動は、この一言から始まったのかもしれない。

そして、そのことに気付き始めるのは、もっともっと、

もっと

もっと

もっと　　・・・

先の話なのだろう。

「アナタは今、百鬼衆リノド・ライの『危険人物』として僕らに監視されています」

・・・は？

『キケンジンブツ』？

何のことを言っているのかサツパリだった。  
そんなことを言われる覚えはない。  
確かに人間との殴り合いはしたことがあるが、リノド・ライに関わることは覚えがないのだ。

「僕らが受けた任務は『リノド・ライの新入社員、レイの監視』です。理由は、リノド・ライが恐れ続けている影の発見<sup>ロスト</sup>」  
ロスト？ロストを発見したことで、俺と、どんな関係があると言うんだ？

「そのロストの名は羅刹。リノド・ライで過去に発生した、ある『出来事』の原因が羅刹ということから、羅刹はリノド・ライにとっ  
て警戒しなければいけない存在です」

「ちよつと待てよ」

何で今そんなこと言うんだ？

ドクリ、ドクリと心臓が高鳴った。

嫌な予感しかしないのは、これからの騒動を予兆してか。

「そしてレイ、アナタは . . .」

ハクは目を細め、一呼吸置いた。

そしてハッキリと、一文字一文字丁寧に、俺にその事実を突き付けた。

「羅刹本人だという疑いがかけられているんです」

そう言ったハクは、俺をからかういつものハクではなく . . .  
それを聞いていたミツは、俺に笑いかけるいつものミツではなく . . .

俺を真っ直ぐ見つめていたサトは、俺に気を遣っていたいつものサ

トではなく

・  
・

事実を突き付けられた俺は

・  
・その瞬間から何かが変わった。

## 噂がナガレル

俺は自分の両親を覚えていない　　．．．否、？覚えてない？と言つよりは？知らない？と言った方が合っている気がする。物心がついたときにはもう影は見え<sup>ロスト</sup>ていたのだが、？両親？という存在がいると言つことを知ったのは、もつとずっと先のことだった。俺は、両親に関する記憶が全くなかった。だからハッキリ言つて、両親がいないことに関して悲しくなったり、苦しくなったりはしなかった。

何せ、顔さえも知らないのだから。

．．言うならば、ポツカリと記憶と記憶の間に穴が開いてしまったような。その部分だけが切り取られてしまったように、俺の記憶の中の両親は綺麗サツパリなくなった。

見ず知らずの父さん、母さん。俺は一体何者ですか？

俺は化け物なんですか？

俺はロストなんですか？

人間として、平穩に生きてはいけないんですか？

何故あなた方はいないのですか？

\*\*\*\*\*

「俺は、人間じゃない．．のか？」

「その疑いがある、と言っているだけです」

絞り出す声は震え、俺は動揺と焦りでいっぱいになる。

一方、ハクはあくまで冷静に答えを俺に返した。

ハクのいつもの嫌味のような口調はなく、調子が狂う。

「ただ　　．．」

ハクは言葉を続けた。

「近くにいた僕は、違うのではないかと考えています。もちろん、その疑いが晴れたわけではないですが　　・アナタに最初に会ったとき、アナタからロストの気配はしませんでした。ですが、僕がアナタの息の音を止めようとしたその瞬間、アナタから膨大なロストの気配が溢れ出てきたんです」

「息の音!？」

「失礼、口が滑りました」

やはりあのとき、俺はハクに殺されそうになったのか。

あのときのハクに殺意はなかっただろう、と言う微かな希望を打ち壊され、俺は少しだけ気を落とした。

「基本的に、ロストは気配を消すことはできません　　と言うことは、ロストはアナタの中の『器』とやらの中に潜んでいた、と」

ハクは一呼吸置いた。

俺より年下にも関わらず、ハクの言動や仕草は大人そのものだ。

認めたくないが、ハクが通ってきた道は俺とは違って、危険な道だったから　　・・こうならざるを得なかっただけなのかもしれない。そう考えると、少しだけ後ろめたさを感じる。

「羅刹は僕が見る限りで二回、アナタの中から出てきた　　と、そう考えるのが妥当なのではないかと思っています。それに、アナタみたいな馬鹿に、僕らを騙せるなんて思ってます。僕らが見たアナタは、あまりにも人間に近すぎる。実際、アナタをロストに見ろ、と言う方が難しいんですよ」

「ちょっと待て。感動しかけたけど、今俺を馬鹿にしたよな! 実際馬鹿だけでも!」

「それともなんですか? アナタはロストだと言うんですか?」  
真っ直ぐ俺を捉えたハクの瞳は、揺らぐことなく俺を見据える。

俺は気付いた。

人を馬鹿にした言動はある。

何が何でも上から目線だ。

それでも　　・・人間だと信じてくれている。

俺さえも人間だと言いきれずにいる中、ハクはそう言ってくれた。

ハクの言動で霞んでいた、ハクの優しさ（か、どうかはわからないが）身に染みた。

「まあ、アナタが人間だろうが、ロストだろうが　　・・・・  
死のうが、僕としては別に構わないんですけどね」

「前言撤回だよ、コノヤロウ。百歩譲ってお前が優しさの欠片を持ち合わせたって、俺に向けてじゃねえな。わかってたけど、わかってたけど!!」

どうしても俺に死んでほしいんだな、と心で悪態をつく。

俺の突っ込みの意味を理解していないのか、ハクは首を傾げて訝しげな表情を浮かべた。

「ハクの言い分は最もなんだ。だから私たち十三班は、レイの意見を尊重しようと思って」  
ミツが笑った。

「もしレイが、出来るだけこのまま平和に過ごしたいと言うなら、僕たち十三班はレイを護る。もちろん、完全に平和に過ごせるとは限らないけど」  
サトが笑った。

「アナタを護るのは気に食いませんけど」  
ハクが呟いた。

「お前は一言多いんだよ」

俺が「感動していた心を返せ」と付け足すと、ハクは鼻を鳴らして顔を背けた。

「オーナーも同じ意見でね、この件の責任者になってくれたんだ。だから、オーナーも監視役としてこの学校に先生として通うことになった。僕たちも、羅刹が暴れてしまったときのためにこの学校に入ることになった。もちろん、レイはリノド・ライ十三班として僕らと一緒に任務を受ける。それ以外は・・・特に生活に支障はないと思うよ」

サトはそう言うと、ニツと笑った。

「まあ、訓練とか、デルターを調べたりとかあるし？学校終わったら本部に通ってね。一応言っておくけど、ウラの間人がオモテの間みたいに安眠できると思わないでね」

「学校から帰ったらすぐに本部の訓練場に直行。そこで三時間戦闘訓練をしてから、デルターを調べるためにデルター詮索に専念。その途中にロストの始末もあるだろうから、一日に寝れる時間は少ないね」

サトの言葉に、ミツがさも当たり前のように付け加える。

「え、何そのスケジュール。恐ろしすぎて耳塞ぎなくなるんだけど俺は先ほどまでの不安と緊迫した雰囲気はどこかへすっ飛んでしまったことに驚き、しかもサトやミツから出てきた更なる事実が顔が青ざめた。

「と言うことで、今日から改めてよろしくね」

「お、おう」

そうだ。今日からサト、ミツ、ハクはこの学校に入ったのだ。

この三人は普通と違って目立つ。ハクは幼顔だが冷静で、大人っぽい雰囲気纏う。

サトは最近聞いたのだが、成績が学年トップに躍り出たらしい。

ミツは言わずもがな、現実離れた美少女だ。

一方俺は、気味の悪い一般男子。どう考えても釣り合わない。

この三人といると、また変な噂が立つだろうなと思っていると、心が折れそうだ。

このまま平穩に暮らせればいいな　　・ ・ ・とささやかな願いを祈りつつ、俺は三人と共に行動することを心に決める　　・ ・ ・否、腹を括る。

そんな願いが打ち壊されるのは、その翌日。

ロストは出現しなかったのだが、訓練は行われた。

一日過ぎただけで、俺は魂が抜けるほどに疲れ果てた。

そこまで訓練をしたのだが、デルターの手がかりすら掴めないとはどういうことだ。

俺は帰って寝ようと、フラフラと寮に向かって歩いていった。

ふと、荒々しい声が俺に降り注ぐ。

「おうおう、お前　　・ ・ ・お前だよ！『二年の怪奇人間』だな？

お前が一年の転校生のチビと一緒に歩いてるところ、俺のダチが見たってんだよ！」

何だよ、『二年の怪奇人間』で。

そして今、何故俺は三年の橋野に絡まれてるんだ？

俺の目の前に仁王立ちをする橋野は、この高校でも一、二を争うほどの不良だ。

三年（俺の一つ上）で受験生にも関わらず、世間的にも悪い印象しかない。

暴力事件は毎日のように起こし、目が合えば死ぬと言う伝説さえ残っている。そんなことあるわけないのだが。

そして、橋野の言う？一年の転校生のチビ？と言えば、一人しか思い浮かばないのだ。

俺は基本、四人で行動をすることにしていたのだが、その中で一番小さ

いのは明らかにハクだ。  
でなくとも、四人の中で一年はハクしかない。

「ハク、のことツスカ」

あの野郎、何しやがった。

俺は心の中で悪態をつきながら、ヘラリと笑って見せる。

所謂いわゆる愛想笑いというやつだ。

だが橋野はその態度を悪く取ったのか「ナメてんのか!!」と怒りを露わにさせる。

「そんで　　・ハクがなんですか」

俺は愛想笑いを消さず、とりあえずハクが何をしたのか聞き出すことにした。

橋野は眉を潜め、激しく歯ぎしりをする。

「風の噂でよお、その一年が俺のダチをぶっ飛ばしたって言ったんだよなあ!!」

どう考えても俺はとばっちりのようだ。あまり目立ちたくなかったと言いつのに、どうしてこつともハクは面倒事を次から次へと流しこんでくるのだろうか。

俺の恨みでもあるのか。

そして橋野は橋野で、風の噂で聞いただけで俺に聞かないでください。

今にも殴りかかってきそうな形相で怖いです。て言うか、殴る気満々じゃねえか。

橋野は俺の胸倉を掴み、顔を近づけた。

印象的な髪型をした顔が近付き、顔が引きつる。

「一年のチビ、どこよ？お前なら知ってんだろ？」

「いや、知らないし」

何故俺に聞くんのだ？

と言う意味を込めて不意に突っ込んでしまい、敬語がどこかへすっ飛んでしまった。

俺は胸倉を掴まれながら、尚も愛想笑いを浮かべる。

正直、迫力のあり過ぎる顔が近くにあるのは怖い。

だが、どうにもロストを見ていると、人間がそれ程恐怖に思わなくなつた。

命をかけることがないからか、ウラの世界の問題ではないからか。

冷静になるのはそのためだろう。

「さつさと言わねえと・・・」

そう言う橋野の顔に拳を叩きこんだ。

「あ、やべ」

無意識である。

咄嗟の行動と言うよりは、ただ単に防衛本能が働いただけなのだと  
思う。

橋野は俺の拳の力に負けて、後ろに倒れ込む。

胸倉を放された俺は、ストンと地面に足をつけて橋野を見た。橋野  
は顔を押しさえて呻いている。

どうしよう。

面倒事に首突っ込んだ。しまった。

元はと言えばハクのせいだ、と舌打ちをすると、橋野が回復しない  
内にその場を去った。

その数日後、橋野が俺に殴られた後暫く気絶していたらしく、ずつ  
と倒れていたらしい。

その姿から『二年の怪奇人間が、橋野を呪った』と言う噂が流れる

こととなったのだ。

そしてその後、この噂は『橋野事件』と呼ばれることになる。

俺はとりあえず、この騒動は全てハクのせいだと嘆いたのだった。

## 影がウゴメク 巻

「うーん、何かピカッて閃かない？自分の能力デルターなのに、何でレイは知らないの？」  
ミツが頭を抱えて唸る。

訓練を始めて一週間が経ったが、あれから羅刹も出てこなければ、デルターが発見されることもない。

一週間前と同じ状態なのだ　否、唯一変わったことと言えば、オコの蹴りを受けられるようになったことだ。オコの能力は『身体強化』であり、蹴りは凄まじい威力である。一週間前の俺が受ければ、たちまち訓練場の壁まで吹っ飛んでしまう。壁にもヒビが入り、俺の体も一瞬で悲鳴を上げる。

だが、やればできるものだ。

一週間それを受け続ければ、自然に体は強くなるようだ。

まだ危ういが、なんとか踏ん張ることだけはできるようになった。

だが、さすが『身体強化』のデルター。

姿は弱々しい少女だと言うのにも関わらず、体つきに似合わない恐怖さえ感じる力。

「じゃ、ミツはどうやってデルターを発見したんだ？」

「私は　．．．えっと、えっと．．．うーん．．．自然に？」

「なんでだ」

俺はデルターに嫌われているのか？いやいや、デルターに意思はあるはずないだろ？

自問自答を繰り返し、ため息をつく。

「自然につて．．．」

「多分、実践に入れば覚醒すると思うんだよね。でも最近、妙に口ストが少なくて」

「妙ですよね」

ビクリと肩を震わせて振り返ると、堂々と椅子に座るハクの姿があった。

いつの間に、と呟くが、ハクはこちらに視線を向けて眉を潜めるだけだった。

「ミツが言った通り、ロストが減少しています。人間が少なくならない限り、そんなことはあり得ないのですが・・・嫌な予感がします。まるで、何かの予兆のように」

眉を潜めたまま、淡々と言った。プライドが高いハクは、進んで自分の弱いところを晒すことは断じてない。

だが、その言葉からは緊張や不安が滲み出ている。

本当に、やばいんだ。

俺はハクの様子から、そう認識せざるを得なかった。

放課後、ハクとサトは本部で訓練をしにすぐさま走り去って行った。キイインと頭の中で耳鳴りがする。頭を押さえるが、鳴り止まない。

ミツが俺の異変に気づき「どうしたの？」と訊いてくる。だが、頭の中で嫌に響く耳鳴りがうるさくて、答えることさえできなかった。

「レイ？」

ミツは俺の様子をやばいと感じたのか、何度か呼ぶ。だが、答えられない。

「ロスト影だ」

ミツはキョロキョロと辺りを見回し、静かに声を震わせる。

気配を察したようだ。俺にも感じる、ロストの気配。

ミツは俺の方を見ては、気配のする方向に顔を向ける。

俺はミツの肩に手を置き「悪い、俺は行けねえや」と声にならない

声を出した。

通じたのか通じなかったのか、ミツは俺の瞳を見ると「すぐ戻るからね」と俺の手を一瞬握って気配のする方向に走っていった。

ミツは俺の身を案じていたのだろう。

だが、俺は一人でもどうにかなる。だが、ロストが相手のミツは

・

すぐに十三班がミツの元に駆け付けることを願い、俺は耳鳴りと闘いながら、近くにあった椅子に座った。

\*\*\*\*\*

「あれ？消えた」

ミツはフツと消えたロストの気配に驚き、足を止めた。

「えッ・・・逆!？」

後ろを振り向き、顔を引きつらせる。

今の状況。

今まで追ってきた気配がいきなり消えたと思ったら、今度は背中の方(つまりは今来た方向)から気配が出てきたのである。

ミツは訝しげな表情を浮かべ、踵を返して気配を追う。

「あれえ!？」

今度は右方向に気配がする。もちろん今追ってきた気配は消えている。

・・・まるでモグラ叩きだ。

それでも追うしかない。

ミツはため息をついて気配のする方向を、片っ端から追うことにした。

\*\*\*\*\*

耳鳴りが止まない。

怖い。

俺は耳鳴りに耐えながら、ずっと机に突っ伏していた。

怖い。

視界が真っ暗な中、歯を食いしばる。冷や汗が額に滲み出ている。

・・・怖い。

「あ・・・」

瞳から流れ落ち、頬を濡らすのは涙。

何故自分は泣いているのか。何もわからない、何もわからないのだ。

それでも俺は泣いていた。

俺が泣いているのは恐怖故か。

「うっ・・・あ・・・っく・・・」

声を殺して独り泣く。

俺が泣いているのは・・・寂しさ故か。

### 《見ツケタ》

ガバツと勢いよく姿勢を起こす。

ゾワリ、ゾワリと体中の鳥肌が立つのがわかった。

声、その声はロストの声だった。

だが、前に聞いた子供の無垢な声ではなかった。

例えるならば、しゃがれた老人の声。

だが、どこか片言で、どこか気味が悪かった。

俺はキョロキョロと辺りを見回し、ロストの姿を探す。

だが、どこにも姿は見当たらない。

《上ダ》

ロストの声に上を咄嗟に見上げると、人影が落ちてきた。ストーンと俺の目の前で綺麗に着地したかと思うと、人影はゆらゆらと俺に近付く。

俺はロストと距離をとり、現状を把握しようとした。

ロストを見つめ、ギクリと肩を震わす。

「にん・げ、ん」

このときの声は、驚きで掠れてしまっていたのだと思う。

口に出したと思っていた言葉は、俺の耳に入ることなく喉で留まっていた。

俺の目の前にいたロストは

・・・

？紛れもない人間？だった。

俺が今まで見てきたロストではない。ロストは影のように真っ黒で、煙のようなモノが出ていて、人間とロストの差が一見でわかるほど、外見が変わり果てているはずなのに。

目の前で俺に近付こうとするロストは、老人の姿をしていた。

弱々しく歩き、ふらふらと覚束ない足取りで俺に近付こうとする。

誰が見ても、ただの人間。

《見ツケタ、見ツケタ》

老人は言う。

皺だらけの老人の顔はニタアと笑い、俺を睨む。

嫌悪と殺意が籠る、恐怖を覚えるような視線に俺は怯んだ。

《羅刹サマ、ヤット見ツケマシタ。ワタシヲ、ドウカ・・コノワタ

シヲ・・・》

老人は俺を恨みをこめて睨んだかと思うと、恭しく頭を下げた。

・・・羅刹？

どこかで聞いたことがある名前だ。と違って記憶を辿ると、ハクがその名前を口にしていたことを思い出す。

確かハクは、俺の中に潜むロストを羅刹と呼んでいた。

老人は頭を上げることなく、低く地の底に響くような低い声で言った。

《貴方サマの『器』ト、シテクダサイ》

「な、にを」

俺は後退した。

『器』？何のことを言っているんだ、この老人　・・・ロストは。

老人は俺に　　否、羅刹にそう言つと、頭を上げた。

そして、俺は老人の顔を見て「うッ」と声を漏らした。

老人の眼球が、真っ黒く染まっていたのだ。

言葉通り、光の反射もなければ、普通の人間にはある黒目がない。

老人の眼球は、ロストのように真っ黒く、まさに闇と呼べるモノ。

先程それに気付かなかったのは、老人が瞼を閉じていたからだろう。盲目とまでは思わなかったが、それでも違和感は感じられなかったのだ。

そして今、老人は目を大きく見開いていた。

見開いた目からは、涙のように真っ黒な雫が流れ落ちる。

《サア、羅刹サマ》

老人はそう促した。

眼球といい、喋り方といい、このロストはすごく気味が悪い。

《ソナナ人間ヨリ、ワタシノ元へ》

「消える、低級」

・ ・ は？

何が起きたのかと、思った。

自分の口から出た言葉。

気味の悪さと恐怖で体が強張っていたと言っのに。

この言葉を発した瞬間だけは  
この時間を面白く感じていた。  
自分でもよくわからない。

ただ、まるで自分ではなかったみたい、俺は一瞬だけこの状況を  
楽しんでいたのだ。

・ ・ もう少し。

《何故、何故デスカ？》

誰かの声が、頂垂れるロストの声と重なって聞こえた。

ロストは頭を抱えると、一瞬で目の前まで近寄ると俺の顔を覗いた。  
真っ黒で光の反射も許さない二つの瞳が、俺の視界で大きく映る。  
俺は「うわッ」と声を荒げると、ロストの体を思いきり押そうと両  
手を前に突き出した。

《何故、何故何故ナゼ何故何故何故！！！！！！》

突き出したのだがその両手は空を切り、意味を為さなかった。  
老人の体に触ることができない、ということなのか？

と、思ったら老人は俺の肩を掴み、ぐいっと俺の体を持ち上げた。  
俺の足は地に置くことができずに、宙で力なくぶら下がる。

さつきは触れなかったのに　　・・

《何故コンナ弱い人間ニ！何故、ソナ弱小二執着スルノデス！？》

弱い弱いを連呼されて、いい気分はしない。

だが、それを突っ込んでいる程の余裕もなく、老人の手は徐々に首に近付き、そのまま俺の全体重が首で支えることとなった。当然酸素が体に入らなくなり、苦しくて体に入らなくなった。

\*\*\*\*\*

「なツ・・・強い、ロストの力・・・？何で、レイのいるところから・・・？」

一方ミツはロストを地道に追っていた。

レイの方向にロストの気配がすることに気付き、立ち止まった。

そしてレイの気配とロストの気配がするところに目を向けた。

まさか羅刹が？と頭の隅にあつた可能性を考える。

だがサトの話によれば、羅刹はSランク以上の、史上初の最強のロストだったと言っていた。

ロストはリノド・ライによってランク分けをされている。

EからD、C、B、A、そしてSランクとEを一番弱いロストとして定めている。

任務はチームの平均年齢と、戦闘能力の成績を総合して配分されている。

ミツが属する十三班は、戦闘能力の成績はそれほど低くはないのだが、まだ若く経験も浅い。その理由から、Bランク以上の任務を回されることはなかった。

だが羅刹との一件から、十三班はかなり危ないことに首を突っ込んでいる。

その任務がSランクであることは、薄々勘付いていたのだ。

何故経験の浅い十三班がSランクをするのかと訊かれても、詳しいことはわからない。

だが、これだけはわかる。

・・・何が、動き出してるんだ。

そして、今の一件。

レイのところからする気配は、Aランクのロストのモノ。とりあえず羅刹でないことに安堵の息を漏らす、ハッと気付くように再びレイの気配の方向に目を向けた。

「もしかして、レイが目的・・・？」

一つの可能性が生まれる。

先ほどから出たり消えたりするロストの気配。今冷静に考えてみたら、レイの場所から遠ざかるように導かれていた。

ミツがすぐに駆け付けられないように、畏を使ってミツだけを誘き出したんだとしたら　　・　　レイは戦闘能力が低い。訓練をしていない上に、今の状態ではデルターすら使えない、オモテの人間と同じようなモノなのだ。

「しまった・・・なんで気付かなかったの？私の馬鹿あ・・・！！」

ミツは弾かれるように走り出した。

## 影がウゴメク 貳

もう少し。

「誰？」

もう少しだ。

「誰だよ」

忌々しい小僧の子、暫くの間『器』としてお前の中に潜んでいた。お前の父親に、形を壊されてしまったからな。

原因が『時』だったからか、修復に時間がかかり過ぎてしまった。

ああ、忌々しい。

人間のくせに、あの小僧は毛色が違った。

我との力の差を目の当たりにしても、いくら痛めつけても、あの小僧の目は変わらない。変わらぬに  
・ ・ 挑戦的で、生意気な目だった。

ああ、忌々しい。

だが、もうすぐ終わる。

この焦燥が、消えるのだ。

「お前、何言ってるんだ？」

もう少し、もう少しで  
・ ・ ・

\*\*\*\*\*

「・・・ツ・・・く」

そうだ。首を絞められていたのだ。  
奇妙な夢が、俺を現実から引き離していた。  
夢の中には、銀色に染まる長い長い髪を揺らす男が何かを言っていた。

俺の言葉に反応もせず、ただ俺を睨みつけながら言葉をつらつらと並べていたのだ。

俺はハッキリし出す意識の中で、危機的状況に陥っていることを思い出す。

《羅刹サマ、モウスグゴノ『器』八壞レル。サア、ワタシの元へ》  
老人は苛立ちを隠せないように、荒々しい口調になっていた。

老人の視線の先には、俺ではなく・・・俺の中で潜む羅刹に言っているのだろう。

そこで思い出した。先ほど無意識に口にしていた言葉。

消えろ、低級。

楽しげに、歓喜を含んだその言葉。当然俺の言葉ではない。俺の感情でもない。

ならばこの言葉、この感情は誰のモノ？

俺の心臓がドクリと音を立てた。

それが、羅刹のモノだとしたら・・・

「はな・・・せ・・・」

俺は苦しさのあまりに、首を掴む老人の手を両手で握る。だが、やはりびくともしない。

《死ンデモラウシカナイ。デナケレバ羅刹サマハ、ワタシヲ『器』ト見ナイ》

フツと不意に首に食い込んでいた手を放された。

重力に逆らえず、崩れるように地面に倒れ込むと、暫くの間むせた。

《何故デスカ》

「『器』って・・・何の、ことだよ」

首を絞められていたせいで、言葉が途切れ途切れになってしまふ。

《オ前八何モ知ラナインダナ、選バレタクセニ》

「選ばれたって、羅刹に・・・か？」

《ソウダ。羅刹サマハオ前ゴトキガ『器』ニナレルヨウナ、小サナ存在デハナイ》

「だから、『器』って何のことだよ」

《形ノナイ羅刹サマノ、形トナル存在ノコトダ。オ前ラ百鬼衆ハ、ワタシタチ影ヲ消スノガ仕事ナンダロウ？滑稽ダナ。今ヤ、ロストノ王トナツタ羅刹サマノ『器』に選バレルトハ》

老人は俺を嘲笑うと、俺を見下ろし瞼を閉じた。

あの黒い眼球が瞼によって隠される。

老人は人間そっくりだった。

見た目はもちろん、言動から行動まで。俺は老人から、ある一つの感情を感じ取っていた。

老人から滲み出るのは  
・・・深い嫉妬。

前に聞いた。

ロストは人間の感情によって創られたモノ。

こつも姿が人間にそっくりなら、もうどれがロストなのかわからない程に、人間に近付いていた。

老人の嫉妬は恐らく、羅刹が潜む俺に向けてなのだろう。

力を持つロストの『器』となれば、自分も強くなれると思っているのだろう。

だが、実際は違ふ。

俺は強くなれてない。護られてばかりで、一人では何もできない。

一人では、何も。

《才前ガ死ネバ、羅刹サマハワタシノ元二来ル》  
無茶苦茶だ。

俺が死んでも、羅刹が他を選べば意味がない。

このロストは何故こんなにも、確信めいたように言うのだろうか。  
《死ネ》

そう言うと、ロストの腕から黒い煙のようなモノが発生していた。  
煙はロストと人間を見分ける証のようなモノ。

この老人はロストなのだと、今初めて実感したような気がする。  
ロストの腕は煙で包まれ、そして煙は消えていく。

・ ・ 露わになった腕は、最早人間の形ではなかった。

腕は針のように尖り、剣のように鋭かった。  
これで刺されるのか、と直感した。

・ ・ ああ、ろくなことがない。

ウラの世界に入ってから、ろくなことがないな。

ハクに命を狙われ、リノド・ライに強制的に入れられ、そのリノド・  
ライに監視され、今また命を狙われている。

何だって言うんだ。

俺はただ、平穩に過ごしたかっただけなのに。

平穩に ・ ・ 生活したかっただけなのに。

ただロストが見えただけで、ただこの体に能力が眠デルターっていると  
言うだけで、ただ俺の中に羅刹が潜んでいると言うだけで、俺は何でい

つもいつも殺されそうになるんだよ。

俺は存在が危険なのか？

俺は人間じゃないのか？

誰か教えてくれよ、もう何も

・  
・  
・

「わからねえよ……」

呟いた声は、空しく消えた。

ロストは武器と化した腕を振りかざす。

そういえば、耳鳴りがいつの間にか消えている。

何だったんだろうな。

いや、もうどうでもいいか。

迫るロストの攻撃。

・  
・  
もう、避けようとも思わなかった。

いらないんだろ？危険なんだろ？

だったらもう、いいじゃんか。

父さん、母さん。なんで俺はあんたらを忘れてるんだ？

なんで、俺を産んだんだよ

・  
・  
!!

・  
・  
・  
・  
生  
・  
・  
きて  
・

ドクリ、ドクリ。

ドクリドクリドクリ、ドクリドクリ

・  
・

《ナ、何ダ。ドウナツテル？》

真っ暗な視界、頼れるのは聴覚だけ。

死ぬことを覚悟し、静かに目を閉じていた。

もう、開くことがないと覚悟していた。

頼った聴覚から感じられた音　　・  
・  
否、言葉は妙に焦っている  
ようだった。

しかも、痛みは感じられない。

感じるのは、

硬い床に座り込んでいて少し痛くて冷たいのと、

焦っているロストの声と、

それから自分は生きていると強調しているように鳴る心音。

ゆっくりと　　・　目を開けた。

「ど・・・して・・・だ・・・？」

声が掠れて震えていた。

ロストの突き出そうとした武器の周りを、光の輪のようなモノがくるくると回っていた。

武器の周りだけではなく、足にも、首にも、そして胴にも。

光の輪はロストが動くことを許さなかった。

輪が回るその部分が動かないのか、ロストは暫くもがき、暴れていた。

だが、光の輪はびくともせず　　・　やがてロストは動くことを

諦めたようにぐったりとした。

「なん・・・だよ、これ・・・」

「『時』のデルター」

返事が来るはずないと思い込んでいた。俺の声に不意に返された言葉。

俺は驚き、その声がロストのモノではないことに気付く。

俺は声の方向に勢いよく振り向き、その姿を確認する。

聞き覚えのある言葉　　・　視線の先に立っていたのは、オーナーだった。

オーナーは一步一步俺に近付き、俺の視線に合わせるようにしゃがんだ。

そして、ゆっくりと両手を俺の両肩に、優しく置いた。

「『時』、それがキミのデルターだ」

「時って・・・時間、の・・・ことが」

「そう」

オーナーは頷いた。そしてオーナーは俺の肩から手を下ろし、立ち上がる。

「さてと」

オーナーは動かなくなったロストと向き合い、ゆっくりと手をロストに伸ばす。

「さよなら、ごめんなさい」

何にしての謝罪なのか。

オーナーの顔は後ろ向きで見えなかったが、声色から少し悲しげだったような気がする。

オーナーはそれだけポツリと口から零すと  
フツと消えた。 ・ ・ ロストは

ふうつと小さく息を吐いたオーナーは、俺の方に振り返った。

「よりもよって、キミが『時』のデルターだなんて、ね」

クスリと眉を上げて笑ったオーナーの顔は、どこか悲しげで、どこか痛々しかった。

俺は何も聞くことができず、座り込んだまま、その顔をじっと見つめていたのだった。

まだ知らない。

何も知らない。

そして知ることになる。

目を背けたその先で、少しずつ  
始めることを。 . . . 影が蠢き

## 過去をカタル

影が消えた<sup>ロスト</sup>                   ・・結果的に俺は命が助かった、と言うことになる。

安堵と共に来る微かな絶望感が苛む。

また、蔑まれなければいけないのか。

また、拒絶されなければいけないのか。

長い時間を過ごす上で必ず傷つくであろうこの時間を、ただじっと耐えるしかできない俺。

辺りを見回せば、散乱する机。ここが教室だと言うことを忘れていた。

ロストが来たのが放課後でよかったな、と場違いなことを思う。突然のロストの訪問に『変換』する暇が与えられなかったからだ。どっちにしても、机や椅子が勝手に動いたりしたら、怪奇現象として騒ぎが起きてしまうだろうが。

「レイ」

オーナーが俺の名前を呼ぶ。

ね。                   ・・よりもよって、キミが『時』<sup>デルター</sup>の能力だなんて、

先ほどオーナーが口にした言葉。

？よりもよって?? 『時』のデルターを俺が持っていることが、そんなに珍しいのか？

「キミに                   ・・家族はいるのかい？」

唐突にそう訊かれ、動きを止めた。

オーナーの考えていることは今でもわからないが、とりあえず首を横に振り「記憶がさっぱりないんだ」と言い放つ。

兄弟もいなければ両親もいない。親戚も、何もかも。天涯孤独、ということだ。

今更悲しいとか、寂しいとか感じることはないが、不安になることはある。

俺が人間だと言う証拠がまったくないから。

「そうか、やつぱり」

「やつぱり？」

「いや、何でもないよ。それにしてもすごい偶然だな、運命が

・・・引き寄せたのか？」

「話がさつぱり読めないけど」

「気にしなくていい」

オーナーはふうつと息をついた。

心なしか、顔色が悪いようだ。いつも穏やかな表情を浮かべている分、今みたいな堅苦しい表情をしたオーナーは違和感を感じる。

「レイ、戦闘訓練は受けているのかい？」

「ああ、学校から帰って寝る間も惜しんでね。過労死しても、おかしくないくらい」

「そっか。それじゃ、本格的に十三班で任務を受けるといいよ。デルトーは実践の方がうまく引き出せる。フォーローは十三班の皆がしてくれるから、心配しなくていい」

「・・・あのさッ」

「レイツ！無事！？」

？なんで、俺の顔見ねえの？？と、そう訊こうとした。

先ほどからオーナーは、俺の視線を避けるようにして会話していた。まるで何かを隠すように。まるで何かを悟られないように。

まだ出会って間もなくオーナーとは短い付き合いなのだが、オーナーらしくないと思う。

そして俺の言葉を遮るように、ミツの叫び声が聞こえた。大分息を切らしている。

オーナーはミツの顔を見た。目を合わせないのはやっぱり俺に対してだけか。

「ごめツ・・・一人に、して・・・」

息を切らしてるからか、言葉が途切れ途切れになっていた。余程急いでたのだろう。

「いいよ、無事だったんだし」

俺は笑うと、オーナーに顔を向ける。

オーナーは俺の視線に気付き、あからさまに顔を背けた。

やはりオーナーは嘘をつくのが苦手なタイプだ。

俺と目を合わせないことに後ろめたさを感じてか、オーナーの顔を見る俺を一回見てから顔を背けるのだ。

素直で逆に笑える。

「はあ・・・よし、落ち着いた」

ミツは深く息を吐いて、俺に笑った。俺もつられて笑った。

「お疲れ様」

「うん。それより、大丈夫だった？」

ミツは心配そうに眉を潜めた。

大丈夫じゃないと言えば嘘になるが、大丈夫と言えば大丈夫だ。

事実に無傷に等しく、心配してもらったようなこともなかった。

だが、問題はデルターの発覚。『時』のデルターという、使い方によつては危ないモノを手に入れてしまったわけだが。

その手に入れる手前、死のうと卑屈的になっていた直前。

誰かの声がしたのだ。

「生きて？と言われた。」

もちろん、俺を殺そうとしていたロストの声ではなく　　・・ま  
してやオーナーの声でもない。その声は弱々しかったが確かに響い  
た、女の声だった。

誰の声？

何か大事なことを忘れていないか？

俺はこの声を知ってるんだ、知ってるんだよ

・

「ミツ！！レイ！！」

突然、焦ったように叫ぶカナの声が聞こえた。

反射的にその方向を見ると、カナがこっちに向かって走っている。

「無事かツ・・・！？こつちの方に、Aランクぐれエのロストの気  
配がしたから・・・ああ、まさに戦ってましたって感じだな」

カナの視線はこの教室全体に移っていた。

教室内の散乱した机や、ところどころに傷が付いているのがよく目  
立つ。

「いや、俺襲われてただけだし」

「私も、別の方にいたし」

「はぁ？何だそれ」

カナが呆れ半分に声を出す。

だが、実際まだ入社して間もない俺に、ロストの相手なんてモノは  
大変なのだ。

大変と言うより、もう殺される一歩手前だったのだ。

もしあのときデルターが出てこなかったら、俺は多分ここにはいな  
かった。

「実際ロストを相手にしたのはオーナーだから」

俺は説明に付け足しをする。

「そうか。ま、無事で何よりだな」

カナは俺の前に立つと、俺の頭をガシガシと強引に撫でた。もともと真っ直ぐにならない俺の髪が、カナの行動によって酷く笑える髪型になってしまう。

俺は「ああああ・・・ちょっ・・・」と声を上げて抵抗するが、カナは笑っただけだった。

「なんか、初めてカナが大人に見えた」  
本音だ。

俺が見てきたカナは、ハクの安い挑発に乗っってしまう単細胞だ。だが、今俺が見ているカナは、頼りになりそうな年上。隣にいるだけで心強く感じるのだ。

「ああん！？てめエ、俺が今までガキだったって言いてエのか！」いきなり頭に乘せてた拳を握るから、俺の髪の毛が束で掴まれた。俺は「いてっ・・・」と声をあげると、カナの手を払う。

案外すぐに手を放してくれた。

「カナ、ミツ、よく聞いて。報告、レイのデルターが発覚した」  
オナーは苦笑すると、話を切り出した。

「えっ・・・本当？おめでと！」

ミツは自分のことのように喜ぶ。

カナも「やったな」と言っつてニツと笑った。

俺はその視線を避けるように俯いた。

言えない。

死のうとしていたこと。

諦めていたこと。

俺はそれを隠すように口の端を上げ、笑顔を作っつて「ありがとう」と言っつた。

「彼のデルターは『時』、使いようによってはすごく役に立つ。ミツ、カナ、これからレイをよろしくね」

「はい、わかりました」

「おう」

オーナーはミツとカナの返事にフツと顔を緩めると、ニコリと笑った。

「それと、ちょっと悪いけど席外してもらえる？レイと二人で話したい」

その笑顔は、一見は優しい笑顔。

だけど俺にはわかった。

・何を覚悟した顔。

俺は見覚えのないはずのその顔を何故か知っていた。

ミツとカナは何も言わずに教室を出た。

残ったオーナーは俺に、床に座るように言った。長話になるそうだが、オーナーも続いて座り、ジツと俺と視線を合わせた。

覚悟した。

そう言わんばかりの顔だった。

「キミには、話しておかないといけない、かな」

微かにオーナーの声が震えていた。いつも余裕を見せ、ヘラヘラと笑って物事を楽観的に見るオーナーが、珍しく何かに怯えているように見えたのだ。

「何を・・・？」

そう訊かざるを得なかった。

何を言われる？何をされる？

まだまだ得体の知れないオーナーと一対一。

俺はロストである羅刹を宿し、オーナーはリノド・ライのアジア支部長と言っていた。

立場から言えば、危険であれば排除であつても過言とは言えないのだ。

だが、次に口にしたオーナーの言葉は、俺の予想とは大きく反するモノだった。

「キミは、十五年前にリノド・ライであつた事件を知ってるかい

・・・？」

「じ、けん？」

\*\*\*\*\*

「何だと思つ？」

「何がだよ」

一方、教室を出たミツとカナは話を聞かないように教室から離れ、二人で肩を並べて座っていた。

ミツは口を尖らせて首を傾げるのを、カナは横目で見ながらミツの言葉を返す。

「レイとオーナーの話だよ」

ミツは体育座りをして、ぎゅゅつと縮こまる。

「知るか」

カナはふうつと息を吐いて言い放つ。

「詮索するなよ？オーナーは聞かれたくない話をするから、俺らを

追い出したんだぜ」

「それはわかっているけどさあ」

むっと頬を膨らませるミツの頭を、カナはガシガシと乱暴に撫でる。

「わわ、やめてよッ」

「あんま深く考えんな、レイなら大丈夫だからよ。俺らが護るって、そう決めただろ？」

「・・・うん」

護る。

そう決めたのだ。

リノド・ライには基本、ワケありの人間しか集まらない。

それは、ウラの世界がわかってしまったばかりに、人生が壊れてしまった人間が大半だからだ。

ウラとオモテを知る者と、オモテだけしか知らない者。

見る世界が違う者たちでは、何も分かり合えはしないのだ。

家族がいない者も少なくはない。ウラと関わった人間は、ロストに殺されることもある。

そして第十三班も、例外ではない。

境遇は違えど、レイもウラによって人生を狂わされた人間なのだ。

それだけで護ると覚悟する　　・命をかけて、護ろうとするのか。　　そう言われてもおかしくはない。

それでも、十三班はそう決めた。

「羅刹によって、レイは見なくてもいい世界と向き合ってる。神様はイジワルだよ」

ぐしゃぐしゃになった髪を手で整えながら、不貞腐れたようにミツは呟く。

「わかってる」

「同情なんかじゃない、そんなことじゃ私たちは動かない」  
「おう」

「わからない。なんでレイを助けようと、護ろうとしてるのか。親しい関係でもなければ、まだ会って間もないのに、ね」  
「そうだな」

「弱くて、脆くて、揺らいでいて、危なっかしくて」  
「・・・」

「それでいて

・

私たちに、よく似てる」

「そうだな」

\*\*\*\*\*

「十五年前、俺はキミたちと同じように任務をこなしていた」  
オーナーは目を伏せて、淡々と話し始めた。

「俺にも　　・　僕にも力ナたちみたいにチームメイトがいたんだ」

オーナーの一人称が『俺』から『僕』に変わった。

「昔は今みたいにチームを複数人数にして、チームの中でチームを組んで任務をする、というような制度じゃなくて、最初から少人数のチームだったんだ」

「・・・」

「僕のチームメイトは二人。つまり、僕らは三人でチームを組んでいた」

何を言い出すのだろうか。

昔のチーム制度を話すために、カナとミツを部屋から出したのか？

「その二人は、僕の親友って呼べるような存在でね。ロストと戦わされる運命は嫌だったけど、そのチームメイトと一緒に任務できることは、すごく嬉しかったんだ」

オーナーは目を細めて、息をついた後に言葉を並べた。

「そして　　・　　羅刹に殺された」

まさか。

オーナーの大事な人間を殺した存在が、俺に宿っているのか。

「それは・・・その、羅刹が　　・・・」  
「憎いよ」

俺がしどろもどろ口にした言葉の続きを、あっさりと吐き捨てるように言った。

つまり、宿り主の俺も憎い、と。そう言う話か。

胸が痛んだ。

出ていけよ、勝手に俺の中に入るなよ。

お前のせいで、オーナーはこんな辛そうな顔をしてるんだ。一番強いロストだがなんだか知らないけど、何で俺に付き纏うんだよ。

「でもね」

オーナーは言った。

「その二人を殺したのは、多分僕だ」

オーナーは笑った。痛々しい笑顔に、俺は思わず目を背ける。

何で笑う？無理矢理笑って何になる？

違う。

笑ってられなければ、もう自分は保てないのだ。泣けばもう、自分を取り戻せない。

泣くこともできず、リノド・ライに居続け、何を思うのか。

「羅刹との戦闘、その二人の死。それらはリノド・ライを混乱させたんだ。史上最強のロストに、リノド・ライの天才が殺されてしまったんだってね」

「天才？」

「僕のチームメイトの内の一人が、そう呼ばれていた。そして、何の偶然かな？その天才のデルターが . . .

『時』なんだ。

そう、キミと同じだ」

## 真実をサトル

俺としては、もう何がどうなっているのかなんてどうでもよかった。ただ、ウラの世界で生きるには、あまりにも辛かった。

影と戦<sup>ロスト</sup>っていくことはいい。

そういう役目なら、それでやっていこうと思った。

命だって今更惜しくない。

覚悟、なんて大層なモノではないが、俺は命を捨てることはいつだってできた。死ぬことが怖くないわけではない。でも、生きるよりはと楽なんじゃないかって、最近はずっと思っている。

両親がいないことに関しては、どうにもならないことはわかっていた。

何をしたって両親が帰ってくるわけでもなければ、両親がいないということに悲しみを感じるわけでもない。

俺にとっての『両親』は、存在だけしかないから。

カナはもう立派な大人のくせに、単細胞で短気で怒りやすくて。それでもときどき、頼りがいのある兄のような存在に見えた。

ハクは冷静で口達者。

よくもまあそこまで嫌味を言えるな、と感心するくらい。

俺よりも年下なのに、俺よりずっとしっかりしていて、それはウラの世界の爪痕みたいにハクを変えたんじゃないかなと考えてしまうくらいだった。

ミツは物腰柔らかかで大人っぽいのに、ときどき子供のような一面を出す。

絶世の美少女と学校中で噂しているにも関わらず、中身は普通の女

の子で、ウラの世界で生きているにもかかわらず、中身は普通の間だと知らされた。

オコは小さくて体つきが細いのに、ウラで必死に戦っていて、過去に辛いことがあったと聞いたけど、そんなことを微塵も感じさせない程に明るく、ずっと笑っていた。

サトは頭脳明晰で、馬鹿な俺とは違って成績も優秀だった。

それでも俺と同じ年なのには変わりなくて、サトとはよく気が合ったりもした。

オーナーは、とにかく胡散臭かった。

見た目から、いい年こいてボンボンのついた白いニット帽はどうかと思う。

ニット帽に金髪、煙草を片手に持つ姿。

怪しい姿には変わりないものの、気付かない内に相当信頼していたような気がする。

いつの間にか俺の中は、ウラで出会った人たちで埋め尽くされていた。

もう、戻れと言われたってオモテには戻れないくらい  
ウラの人間に執着していたのだ。 . .

優樹のように、第十三班やオーナーが大事になっていた。ただそれだけだったんだ。

今気付いたんだ。

羅刹？

知るかよ、俺には関係ねえ。

俺が宿してしまった責任を持って羅刹を消すから、だから

こんな俺を、認めてほしい。

\*\*\*\*\*

「ずっと、考えていた」

オーナーは息をついて言った。

「何故羅刹がキミみたいな普通の高校生に宿っていたのか、って」

「それは、俺だって」

考えていた。

羅刹の存在が確認できたのはカナに出会った後。

それまでは、ロストがなんなのかさえ知らなかった。

と言うことは、羅刹はずっとずっと俺の中にいた、と言うことになる。

俺が俺を素材だと知る前から、潜んでいたと言うことになるのだ。

「羅刹の狙いがわかったんだ」

「え？」

「羅刹はずっと封印されていた。僕のチームメイトの一人によって、ずっとね。その人も『時』の能力を持っていた。その人は、羅刹の『時』を止めることで羅刹を封印したんだ」

「時を、止める」

さらりと言うその言葉だが、実際はとても並はずれた意味を持つ。

時間を止める。

生きる、というその事実。

そこにいる、と言うその事実。

全てをかき消してしまうその力には、さすがの羅刹も勝てなかった  
ということか。

「いや、正しくは『封印しかけた』かな？」

「できなかつたのか？」

「『時』を操るって言うのは簡単じゃなくてね。万物の常識を優に超えてしまっ、そんなデルターを操るにはそれなりのリスクが伴う。『時』を止めるためには、『時』が必要だ。デルターを使うにも時間がかかる、天才の手にかかっても、ね。その僅かな時間に羅刹は粘った。時が止まる寸前に、どこかへ姿を消したんだ」

天才でも何でもない俺が持つデルターも、操ることが難しいのだから。

「羅刹は戦闘によって深手を負った上に、時間を止められた。傷を癒すこともできずに、ずっとずっと『器』の中で時が動き始めるのを待った」

「その『器』が、俺・・・？」

「そう言うことになるね。羅刹の力は大きすぎるから『器』がより大きい人間を探したんだ。『器』が小さい人間の中に入っても、人間が死んでしまっ。『器』がなくなれば、羅刹はどう足掻いたって生きてはいけなからね。そこに、キミがいた。形振り構っていられないその状況で、その場のぎには絶好の人材だったってことだよ」

「俺のせい・・・」

「キミのせいじゃないよ。何せキミは、逃げられる状況じゃなかつたんだから」

「どっ言うことだ？」

「・・・今はまだ話せない」

「そうか」

『今は』と言うことは、『いつか』は話すと言うこと。今根掘り葉掘り聞くよりも、いつか言うてくれるのを待つ方が、オーナーにと

「つても俺にとつてもいいんじゃないかと、無理矢理自分自身を納得させ、頷いた。

「僕の自己満足だと思ってくれていい。

「これらを話すのも、

キミを護るために羅刹の監視役になったのも。

全部、感謝しなくていいから

．．．

「．．．」

「だから、一つ約束してほしいんだ」  
オーナーは俺の頭に手を乗せ、笑った。

「生きて」

「ツ．．．」

「生きて、生きて、幸せになってほしい」  
見透かされた気がした。

死ぬことに躊躇いがなかったことも、羅刹が憎くて堪らなかったことも、自分自身がとつてもなく嫌いになってしまったことも、全て、全て、

何で、そんなことを言うのかはわからなかった。

オーナーには何も関係ないと、手を払うことだってできたはず。それでもただジツと座り込んでいたのは、どうして？

生きていいと言われたから、嬉しかったんだ。

「生きて、いいのか」

掠れた声だったが、よく部屋に響いた。

目頭に熱が籠り、気を緩めれば落ちてしまつくらい、俺は涙を目に溜めていた。

瞬きをすると、重力に逆らわずに真つ直ぐ落ちる涙が、ハタハタと地面に染みる。

「いいんだ」

オーナーは笑った。

眉を下げて笑う顔、今度はとても嬉しそうだった。

何か吹っ切れて言ったような、それでいて大切なものを見つけたような、そんな顔。

オーナーはそのまま俺の体を引き寄せると、力いっぱい抱きしめた。

痛いし苦しいし、何事かと文句を言おうとするが、

やめた。

「ごめん、巻きこんでごめん。生きていてくれてありがとう」  
そう呟くオーナーの言葉が、妙に震えて俺の耳に響いたから。

謎が解けていく中で、真実を悟る中で俺は覚悟する。

「約束、生きれるだけ生きるよ。だから、オーナー泣かないで泣いてないから」

声を震わせながら強がるオーナーに、俺は小さく笑った。

伝えたいよ

「あ。レイ、オーナー」

「何泣いてんだ、二人して」

話が終わって教室を出ると、待ちくたびれたように眉を潜めるカナと、ニコリと笑うミツが待っていた。

二人ともずっと待っていてくれたことに、少しだけ罪悪感を感じた。

「泣いてないし」

「泣いてないから」

すぐさま俺とオーナーが否定すると「目真っ赤だけど」とミツが追い打ちをかける。

「レイは良いとして、オーナーはもう良い大人なのにな」

カナは辛辣に吐き捨て、オーナーはその言葉に傷ついて嘆いた。

「レ・・・イツツ」

ドスツと背後から衝撃がくる。俺は衝撃に耐えきれずに前のめりになり、そのまま倒れ込む。

すると背中に重みがあり、そこから声がした。

「レイ、遊ぼお」

「ちょッ・・・オコ、重たい降りて死んじやう」

ケホツと咳き込んで俺の背中に乗るオコに苦しさをアピールするが、オコはニコニコ笑ったまま降りようとしなない。

どうしようか考えていると、嫌味ったらしい声が降ってきた。

「何這いつくばってるんですか？気持ち悪いんで、早く潰れてもらえます？オコ、そのまま踏み潰してくれて構いませんよ」

「ハク、何言ってるの？死んじゃうよ？」  
「いつてらっしゃい」  
「どこに!？」

俺がバタバタと暴れると、オコの重みがフツと消えた。

「まったく、何してるの？」

オコを抱っこして呆れるのは、苦笑いするサトだった。

「おいこらハク、てめえ今俺の足踏んでっただろ」

「気のせいじゃないですか？」

「お前焼く、今すぐ焼き殺す」

「ご勝手に」

カナとハクは早くも言い争い、

「はい、ミツ。これ新作のお菓子」

「やった、ありがとう」

「どういたしまして」

「おいしい!！」

ミツとサトは勝手にお茶会を始め、

「レイ？」

「オコ、とりあえず顔近いから」

「レイに、あとでオコのうさぎちゃん貸してあげるね」

「うさぎちゃん？」

「オコの友達」

オコは俺を慰めるように寄り添い、

「それはいい、オコは優しいねえ」

「オコ、優しい子だもん」

「うさぎちゃんはおコの宝物なんだ。滅多に宝物を触らせないオコなのに、珍しい」

「レイは特別なのぉー」

オーナーはそんな第十三班を見て柔らかく笑う。

そして俺は

・・・

「みんな」

俺の呼び掛けに皆が振り返る。

「ありがとう」

感謝仕切れないほどの感謝の言葉を届ける。  
届いてほしい。

大切だから。

もう、大切なんだ。

だから

・・・

ありがとう。

俺がそう言ったときの皆の顔は、嬉しそうだった。

伝えたいよ（後書き）

初めての人も、そうでない人も。  
こんにちは、れんです。

どうにか辿り着きました。

「繋ぐモノ」、レイのデルターが発覚（笑）

ミツたち、高校に乱入してきましたね（笑）

ちよつと補足しますけど、ミツの自己紹介のとき言っていた

「矢倉美鶴」やくらみつる

・・・は本名です。

これからどんどん本名とかも出していきます。

レイの本名とか、忘れないでくださいね（笑）

出て来ないから、記憶からどんどん薄れていく（笑）

オーナーは事件があつてからずっと苦しんでました。

それで、その罪滅ぼしをしようとしてレイを護ることを決めました。

第十三班がレイを護ることを決めたのにはワケがあつて、

それはまた今度書きたいと思います。

十五年前の事件についても、追々書いていこうと思います。

で、

次回からは、デルターや、フロウや、リノド・ライ。

カタカナだけで書きます。

漢字はもう使わないので、よろしく願います。

ちょっと急いで書いたもので、もしかしたら修正があるかもしれない  
せんが

温かい目で見守ってやってくださいな。

それでは、「繋ぐモノ」をこれからもよろしく願います。

「違和感」と言う名の「不安」

「右」

「ラジャ」

タンツタンツと地面を蹴り、小さな小さな少女が走る。

ただし、尋常ではないスピードで。

「ああ、次左ツ」

その小さな少女の前を、黒い物体が通る。これも、尋常ではないスピードだ。

そしてその小さな少女　　オコに指示を出す俺も、また尋常ではない。

俺はオコの前を走る真つ黒な物体に集中している。

デルターを発動するために、狙いを定めているのである。背後には、ハク、カナが俺の様子を見ている。

くそ。

さつきからハクが鼻で笑うのが聞こえる、集中できねえ。

「あ」

ハズした。

今回のロストは少々厄介だ。最近ロストが急増し、学校にいと決めた俺も学校に行けなくらいロスト処理が間に合わないのだ。前は激減していたし、どうなっているんだ？

そして、ロストのランクも徐々に上がっている。

今回のロストはCランク、Dランクがつい先ほど進化したようで、ロスト独特の能力を手に入れたようだった。

このロストはスピード。

実を言うとここはただの道端、人もよく通る道だった。

人々は何事もないかのようにここを悠々と通っている。  
それが羨ましくて堪らない。

見えるのと見えないので、こんなに違うのか。

ここを通る人間は見えないから、逃げることもできない。

そんな人間を後ろでハクは『念』で囲い、ロストが人間に攻撃しないように護っていた。ざっと四十人はいる人間を一気に、だ。

さすが天才、そう呼ばれるのも頷ける。

そしてその天才が、それらを実行してる間にも、俺を鼻で笑う余裕もある、と。

腹が立つ。

だが、ハクにはロストを捕まえることができなかった。

『念』でも動きを縛ることはできるのだが、このロストは何せ早い。周りの人間を守りつつ、ロストを捕まえるなんてことはさすがにできない。

カナは『炎』だが、周りには人間がいる。俺たちは存在を消したわけではなく、ただ肉眼に認識されない存在になっているだけなのだ。よって、『炎』が当たってしまうと、見えなくても燃えてしまうわけだ。

今ここに駆り出されたのはハクとカナとオコと俺、ミツとサトは待機だ。

そう言えば・・・俺、ミツのデルター聞いたことないな。

なんてぼんやり思いつつ、ロストに集中する。

今に至って、オコがロストを誘き出し、俺がデルターで動きを止めようとロストに狙いを定めているのだが・・・初心者がそんな芸当できるはずがない。

半ばヤケクソだ。

「頑張ってください」  
ハクが俺に声をかける。

「アナタが頑張らないと、僕たち帰れないんで」  
「うるせえ」

ハクはどうも嫌味つたらしい口調で言う。  
俺はため息をついてロストに視線を戻す。

こうも横から口出されたら集中できないじゃないか。否、それが目的かコノヤロウ。

俺は視点を絞るために両手の親指と人差し指の先をくっつけ、四角形を作る。

それで集中する範囲を決め、そこにロストが来てくれれば万々歳だ。  
「あッ」

視界に入る俺の両手の四角形の中に、ロストが入る。

今だ、と頭が思う前に発動していた。

ブウウンと周りで音がしたかと思うと、光の輪がどこから飛んできて、あれだけ尋常じゃないスピードで駆けていたロストを縛りつけた。

足や腕が光の輪で縛られ、身動きが取れないロストをカナが「やっとか」と声を漏らしながら炎で焼く。

ロストは手こずっていたにしてはやけにあっさり消えて無くなった。それにしても、カナはいいところ取りだな。

「案外早く終わってしまいましたね　　・・チッ」

「今舌打ち聞こえたけど」

「気のせいですよ」

相変わらずハクは反抗的だ。

「それにしても、最近ロスト多くねえか？」

「頭が悪いカナがそんなことを言い出すなんて、ビックリですね」

「よし殺す、お前今すぐ焼き殺す」

「はいはい」

考え込むように言うカナの言葉に、ハクは大袈裟に驚いて見せた。その仕草にカナがキレて、俺がそれを宥める。

いつもはミツヤサトの役目だが、生憎二人ともはここにいない。

「ロストが多くなっているのには同感ですね。本来、ロストなんてモノは、一日にそんなに発生しませんし。大体、レイに会ってから第十三班はAランクに二回も接触しているなんて、おかしいでしょう」

「それって、俺が悪いって言うてんのか？」

「そうは言ってませんが？」

そう言っているようにしか聞こえない。とそう言おうとしたが、キリがないからやめた。

「んじゃ、帰るか。オコ、いつまでそこに突っ立ってんだ？」

「・・・」

オコはカナの声に、ビクリと肩を震わせた。

オコが人見知りのときは結構あるが、第十三班に対してはいつだって明るかった。

だが今は何故か、カナに対して警戒心を抱いているようだった。

カナは首を傾げ、オコに近付き肩に手を置く。

「オコ？」

「あ・・・うん、帰ろお」

カナが腑に落ちないような表情を浮かべる中、ハクは目を細めた。そんなハクの様子を見ている俺も、なんとなく何かがあることを悟った。

オコはカナの腕をぐいと引くと、「帰ろー!!」と笑った。その笑顔には覚えがあった。

それは　　・・俺が？普通じゃない？と知った人間が浮かべる笑顔。  
薄っぺらなその笑顔を浮かべた人間は、俺の周りから段々消えていった。

オコの笑顔は、そんな感じ。

無理矢理口の端を上げて、目を細め、笑っているように？見せている？だけ。

ハクとカナはこのことに気付いているのだろうか。

オコに違和感を感じるようになったのは、このときから。

\*\*\*\*\*

「ねえ、オコ知らない？」

「オコ？いねエの？」

「うん、寮のどこにもいないの」

「ま、そのうち帰るだろうよ。誘拐犯に誘拐されたとしても、心配すべきはその誘拐犯だからな」

数日後、オコを抜かす第十三班のメンバーはミツの部屋に集まっていた。

ミツとカナの会話をぼんやりと聞いて

「ちよつと待て、なんでオコが寮なんだ？」

俺は違和感を覚えて会話を中断させる。

寮と言えば、俺、サト、ハクやミツが寝泊まりする寮以外、この辺りにはないのだが。

しかも、オコは俺たちの学校の生徒ではないため、寮は使えないとする。

じゃあ、何故オコが寮？

「あれ、知らないんだっけ？オコは寮にいるんだよ？」

「知るか！！聞いてねえよ、そんな話！！」

「私、転校生で一人部屋だから、オコもそこに住むことにしたの。まあ、部屋に入る時は『変換』すれば周りも見えないし。差し支えもないしね」

「なんだよそれ、ウラってのは何でもアリなんだな」

俺は思わずため息をついた。

「と言うことで、案外二人部屋に三人ってキツいんですね」

「え？」

ハクがニコリと笑う。

「あの単細胞、アナタが引き取ってくれませんか？」

「なんだとコラ、ためエ人を荷物扱いして・・・」

カナは拳を震わせ、ハクを睨みつける。だがハクは笑顔を崩さない。

「まさかとは思うけど、お前ら三人で二人部屋に住んでたのか？」

「うん」

「まあ」

「はい」

サト、カナはバツが悪そうに返事をし、ハクは眉を潜めている。

「まさか、カナと同じ部屋にされるとは。酷い生き地獄でしたね」

「それはこっちのセリフだ！！」

「んじゃあ、カナが俺の部屋に来るってことか？」

俺は丁度一人部屋だし、その方がいいか。

「んで、話戻るけど」

ミツが呆れたように横に首を振り、ため息をつく。

「オコ、最近おかしくない？」

「おかしいって言うこと?」

サトが聞き返す。

「四人で任務行ったときあったじゃん? 帰ってきてから、なんか妙に余所余所しくて。カナ、レイ、ハク。なんか心当たりない?」  
心なしが、ミツは凹んでいるようだった。

自分の口から言ったことはないが、見ていればわかる。

ミツは第十三班を家族だと思っている。

そして、その家族に、余所余所しくされたなんて。

・・・ちよつと待て?

オコ、任務終わった辺りからおかしくなかったか?

「作り笑い」

唐突にハクが言った。

「オコ。任務終了後、作り笑いを浮かべていました」

「あ、それ俺も思った」

ハクに続き、カナも言った。

そう、作り笑いを浮かべていた。

俺の周りにいたオモテの人間と同じような、人工的に作られた笑顔。

明るく、元気で裏表のないオコには絶対ありえないような、そんな顔。

だから違和感を感じていた。

そして、その笑顔の理由が、オコがいなくなったことと関連していたなら。

なんか、嫌な予感がする。

それにしても　　・・・みんな見ていないようで、見ていたんだ

な。

ハクは何にしても鋭いからわかるが、カナは絶対気付いていないと思ってた。

単純で、視界が狭い人なんだと。でも違うんだ。やっぱり年長者なんだな、と少しだけ見直した。

「ま、さつきも言ったけど、そのうち帰るんじゃないかねエの？心配いらないねエって」

「そうかなあ」

カナはそう言っただけでこの会話を終わらせ、ミツは納得がいかないように眉を潜めた。

\*\*\*\*\*

「帰ってきませんね」

「うん・・・」

ミツは更に凹んでいた。

「誰かさんが帰ってくるとか言っというて、帰ってこないんですけど、どう責任とってくれるんですか？なんだったら死んでくれても構いませんよ」

「てめエ・・・」

カナは怒りに堪えているようで震えている。

いつもなら帰っている時間から三時間ほどが過ぎた　　・・・現在

午前一時過ぎ。

オモテの子供はもう寝静まっているに違いないが、オコはウラにいる社員だ。

夜外を出歩くことも少くない。

誘拐されたとしても、可哀想なのは犯人の方だ。

本当は心配することでもないのだが　　・・・オコだからこそ、作り笑いを浮かべたというのが引つかかる。

「　　って言うかさ」

ミツが話を切り出し、サトが首を傾げる。

「うん？」

「レイは？」

「いねエな。本部　　・　　だつたら、誰かに声かけていくし、誰も聞いてないよな」

カナは顔を引きつらせる。

「まさか、な。オコを探しにいつてるとか、そんなことは

」

「まつさかあ、だつてレイはまだデルターも操れないんだよ？辛うじて発動できるくらいにしか、成長してないし」

「それに、誘拐されて危ないのつてレイの方だよ。まあ、男だしあり得ないけど」

サトが唸って、苦笑する。

「ま、誘拐がないにしても、監視対象のレイを出歩かせるなんて上に知られたら、僕たち結構危ういんですけどね。羅刹も今は大人しいですけど、いつ出るかわかりませんか？」

ハクが最後に追い打ちをかけ　　・　　四人は勢いよく立ちあがる。

「これ、やばくね？」

カナが呟いた言葉は、誰に返されるもなく部屋に消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4342y/>

---

繋ぐモノ

2011年11月20日19時31分発行